

超次元ゲームネプテューヌ ロトの血を引かされし者

ただのファンだよ。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あり日、神のミスにより死んでしまった青年

神は青年に償いとして、(望んでいないのに)新たな生と勇者の力を与え(間違つて)別の世界いや別の次元に送った。

これは、望まない転生によって勇者の血を引きし者にされた青年『ロト』の物語である。

目次

零次元ゲーム ネプテューヌZ 『ロトの血を引かされし者』

第一話	1
第二話	5
第三話	7
第三・五話	10
第四話	13
第五話	17
第六話	22
第六話	27
第六話	31
第六話	34
第七話	40
第八話	43
第九話	45
第十話	48
第十一話	51
第十二話	57
第十三話	60
第十四話	63
第十五話	67
第十六話	71
第十七話	75
第十八話	78
第十九話	81

第二十話

第二十一話

V.S. マジエコング

91

86

零次元ゲーム ネプテューヌZ 『ロトの血を引かさ
れし者』

第一話

ここは一体？

たしか俺は下校中に突然視界にノイズが走り、次の瞬間目の前にト
ラックが現れ、そのトラックにぶつかって…ぶつかって…ぶつかって…ぶつかって…その
先が思い出せない。

『目が覚めましたか？』

「…だれだ？」

『私は、あなたたちの言うところの神です』

「…その神様が何の用だ？」

『えつと、その…』

???.突然どうしたんだ？

『すみません！あなたは、私のミスで死なせてしまいました！』

神様と名乗る人は勢い良く頭をさげる。

『そのお詫びに、貴方に新たな生を与えま「いりません」……す…え？
今、なんと?..』

「だからいりません」

別に死んだからってどうってことないしな、最後に家族と会えな
かったのが心残りだが。

『え!?!でつですが、何かしないと神として』オロオロ

案外メンタルの弱い神様だな。

『こっこうなったら』ボソボソ
ん?..

一体何を？

『すみません!!?..』

神様は、こちらに手を向けその手から光を放つ。

次の瞬間俺は意識を失った。

神様 side

なんて人でしよう。

今までいろんな人を見てきましたけど彼のような人は、見たことありません。彼はきっと大物になるでしょう。

さて彼は・・・!?間違えて違う世界に送っちゃいましたー!!?!

どどど、どうしましょう!?!?

はっ!今からでも遅くわないはず、彼に特典をあげましょう!時間がありますね彼が別の世界に着く前に。

え、えーい!!

神様 side out

—————

……………ん。

ずいぶん懐かしい夢を見たな。

俺は、転生してから数年が経った。

転生したばかりの頃は大変だった。

目が覚めると、辺り一面廃墟。空には、割れ目がいくつもあり。そこらじゅうにモンスターがウジャウジャ居やがる。

色々驚く事があったが一番は、そのモンスターと戦える自分だった。

ためしに割れた鏡で自分の姿がしてみると、逆立った金髪の毛に、現代じゃあ珍しいゲームでありそうな赤い服にジーパン(なぜここだけ現代?)そして、蒼い瞳。そして何故か使いこなせる剣。

思わず、「どうしてこうなった?」と呟いたほどだ。

まあ、会話のできるモンスターや、唯一人の見た目をした少女『天王星 うずめ』のおかげで生きているが。

今、俺は凶暴なモンスターに住処をおわれた善良なモンスターたち

の救助のため、うずめたちと別の街にいる。

斬!!?

「グウワアー!!?」

「今だ行け!」

「わっわかりました『ロト』さんも気を付けて」

「言われるまでもない。」

「『ガアアアア!!?』」

さて、私はモンスターの相手を続けるか。

「…行くぞ」

俺は、そう呟くと駆け出した。

ある程度モンスターを倒した後、善良なモンスターたちがいる避難所に向かっていた。

「あつロトさん!みんな!ロトさんが来たよー!」

わーわーと言いながら、無数のモンスター達が集まる

「ありがとうございます!ロトさん!」「ロトさん、無事でしたか!」

「さすがロトさんだ!」

「お前達も無事だったか」

「はい!ロトさんのおかげで」

「そうか、なら『PPPP!』ん?」

突然、無線機が鳴る。

…うずめから?

『ピッ!』「どうしたうずめ」

『よおロト、ちよつとこつちに来てくれないか?』

「いきなりなんだ」

『いや、あいな——でな』

「……わかった、すぐに行く」

『おう!場所は——だ』

「了解した」『ピッ!』

「とゆうわけだすまないが、もう行くとする」

「はっハイ!わかりました、気を付けてください」

俺はうずめに言われた場所に向かって走り出した。

第二話

ネプギア side

どうも皆さん、私は『ネプギア』って言います。

プラネテューヌの女神であるネプテューヌお姉ちゃんの妹で女神候補生をしています。

…誰に言ってるんだろう？

私たちは、お姉ちゃんが拾ってきたゲーム機から出てきた穴に吸い込まれて、気が付くとここにいました。

途中、色々とありますが、ここで出会った天王星うずめさんとうずめさんと一緒に助けに行った魚のモンスターの『海男』さんたちの拠点に来ています。

『ピッ!』「よし、今呼んだから、すぐ来ると思うぜ」

「は、はい」

今、うずめさんが連絡していたのが別の場所でモンスターの救助をしているロトって人らしいです。

「ねえーねえー、うずめ。そのロトってどんな人？」

「ん？ロトか？ロトわな、すっごくカッコよくて、強くて、いいやつなんだぜ！」

うずめさんは、まるで自分の事のように満面の笑みで話し出しました。

「あいつはな」ペラペラ

五分後

「そしたらあいつ」むかむか

十分後

「それでさ」

「あつあの、時間も経ちましたしそろそろ…」

「ん？うお！ほんとだ、結構経ってる」

「ははは、うずめはロトのことが好きだからな」

「うつつわあー!!? な、何言ってるんだ海男!!? ろ、ろろろロトのことが好きだなんてあるわけないだろ！」カァー

「ツンデレ一丁、いただきました!」

お姉ちゃんがうずめさんをからかっていると。

「うずめー!どこだー?」

初めて聞く声が聞こえてきた。

「おお!噂をすれば何とやらだね!」

「ろっロト!」

私たちが声のする方を向くとそこには、金髪で赤い服を着た男性が居ました。

「そこにいたかうずめ。…ん?どうしたうずめ、顔を赤くして?」

「バ、バカ!? なっなんでもねえーよ!」

「…?何故怒られたんだ?…:…まあいい、ところで、その二人は?」

すると、ロトさんはこちらを見る。

「あつ!は、初めまして、私はネプギアって言います」

「私はネプテューヌって言うんだよ!」

「…」

すると、ロトさんは黙ってこちらを見えています。

「どうしたの?」

「ロト、この二人は警戒する必要はないよ。この二人は、うずめと共に俺を助けてくれたんだ」

「……………そうか」

ロトさんは、そう言うが変わらずこちらを警戒したままです。

「もお!!海男もこう言ってるんだから信用してよ!」

「お、お姉ちゃん!?」

「見ず知らずの人間を信用するほど俺は人ができていないからな」

「なんだどー!」

「落ち着いてお姉ちゃん!」

「ロトも、挑発するなよ!」

「この程度の挑発にのるようならおとなしくしている、ただの邪魔だ」
「なにをー!」

うーどうしよお?」

前途多難だよ。」

第三話

海男 side

まったく、ロトには困ったものだよ。

いくら初対面だからねぷつちたちを警戒しすぎだろ。

「もう！なんなのさー！」

おかげで、ねぷつちの機嫌が悪くなってしまった。

「落ち着いてお姉ちゃん、私たちロトさんと初対面なもの、そりや警戒だつてするよ」

ぎあつちも困った顔でねぷつちを説得している。

「ねぷつち達は、大丈夫だつて。俺たちを助けてくれたんだぜ」

「フン、どうだろうな。行く場所がないからうずめを助けただけかもしれんぞ」

「ロト!!?」

「……フンッ」

「あ、待てよロト！」

ロトは行ってしまった。

「んだよ、ロトの奴」

「まあまあうずめ。ロトのことは、オレに任せてうずめはねぷつちの相手をしてやってくれないか？」

「…わかったよ」

うずめはねぷつちたちの方に向かった。

さて、俺はロトが行った方に向かう。

ロトはすぐに見つかった。

「ロト」

「海男か、…どうした？」

「どうしてロトはあの二人をそこまで警戒しているのだ？」

「……あの二人、特にあの小さい奴。ネプテューヌと言ったか？あいつからは、~~箱~~デカブツに近いものを感じる」

「なに…?どうゆうことだ？」

「そこまではわからん……だが何か関係がある可能性は高いだろう」

「……そうか」

『おい！二人ともー！飯にするぞー！』

どうやら、うずめが呼んでいるようだ。

「……いくか」

「そうだな」

私とロトはうずめたちのいる部屋に行った。

――

食事中、うずめやねぷちたちは雑談していたが、ロトは四六時中無言で食べ、一番に食べ終わり食器を片付ける。

「……」

食べ終わったロトはそのまま部屋から出て行った。

「……ねえ、うずめ？」

「ん？どうしたねぷち」

「ロトってずっとあんな感じなの？」

「んく、だいたいあんな感じかな」

「えっ、私たちがいるからじゃなくてですか？」

「ああ、ロトはずっとあんな感じだけ」

「ロトはあまり自分から話そうとしないからな」

「もう、楽しいご飯のはずなのになにも言わないなんて！おかげでこっちまで空気悪くなるよ」

「まあまあ、お姉ちゃん。そういう人もいるよ」

「よし、私決めた！すぐにロトと仲良くなってやるもんね！」

ハハハ、これは、少し大変そうだなロト

――

ロトside

俺はソファに寝転びながら、ネプテューヌたちについて考えていた。

今の所、悪い奴には、思えん・・・が、デカブツのこともあるから
な、信用できないのも確かだ。

まあいい、考えるのは明日にしよう。

俺は目を閉じ眠りについた。

第三・五話

「プーリーーン」

うるさい奴だな、まったく

「プーリーーン。プリンがないとわたし死んじやうよー。プーリーーン」

・・・イライラ

「プリンは作らないとないな」

「やだやだやだー！プーリーーン」

「やれやれ」

ムカツ

「うずめ！どうにかしてやれ！」

おまえの「妄想」で。

「そんなこといわれてもなあ。けど、俺もプリン食べたくなってきたな。案外、その百貨店が入ってたビルの食品売り場に材料とか残ってないかなー」

ほらきた。

「プリンの素があれば、更に超ラッキーみたいな？」

もうすぐか？

「残ってたら、うずめ。久しぶりにすいーつ作ってみんなにご馳走しようと思うんだけどなー」

「メツチャいろんなプリンを作りまくってみんなでプリパするのはどう？チョコー楽しそうでしょう」

そろそろいいだろう

「よし、ねぶっちー！もしかしたら、材料が残ってるかもしれないねえ。探しに行こうぜ」

「そうだよね！少しでも可能性があるなら探すべきだよね！」

ダダダダ！

・・・

「行ったか／ね／ちやいましたね」

これで少しの間静かになるだろう

「ネプギア！卵見つけてきたよ！」

「えっ!?？」

もう、帰ってきたか

「他にも、とりあえず必要そうなのを片っ端から持ってきたぞ！それも、新鮮な奴」

「そこでモンスターがお店出してたんだ」

「これはいくらなんでも都合が良すぎる」

今更なにを、そうゆう「能力」だろうに。

「この際なんでもいいじゃありませんか」

「じゃあ、さっそくプリン作ろうぜ、ぎあっち」

「はい！」

「じゃあ、わたしはそれまで海男と遊んでよっかな」

ピピピピッ！

「すまない、ねぷっち。

どうやら仲間からの連絡のようだ。

少し席を外させてもらおうよ」

「行っちゃった……。はあ…プリンできるまでどうしよう……。……」

「…何故、俺を見る？」

「プリンできるまで、話そうよ」

「断る」

「まあまあ、そう言わず。それでロトつてさ」
話を聞け。

「いつから、この次元にいるの」

「…今から、二年ほど前だったか？」

「へえ、そんなにここにいるの。」

「じゃあさー」

「お姉ちゃん、プリンできたよー」

「わりい、ねぷっち。」

作りすぎたせいでかなり待たせて…」

「それじゃあ、次は」

「…いい加減にしろ」

「まあまあ、それでさ」

「…ハア」

「…どうやらねぷっちと仲良くなったようだな」

「みたいですね」

「おーい！プリンできたぞー！」

「本当!? わーい！」

「・・・」

「…ハハハ、まあ口トも一緒にたべようじゃないか」

「…そうだな」

第四話

プリンを食べ終わったあと、海男の提案で沢山のシエアクリスタルがあるかもしれない場所。

『シングウサクラ公園』に向かっていた。

「……」

「ねえ、まだー？」

「もう少しだから我慢してくれないかねぷっち」

「ええー、もう疲れたよー」

「ねぷっちは体力ねえな」

「だってー、さっきからずっと歩いてるだけじゃん」

「道中でモンスターと戦うよりマシだろ？」

「ぶうー、そうだけどさあ暇すぎるよー」

「・・・なら、ネプテューヌ」

「ん？どうしたの口ト？」

「あいつらと戦ってみたらどうだ」

俺が指をさした方を見ると無数のモンスターの群があった

「・・・え？」

「あの量は少し大変だぞ。どうだ、いい暇つぶしになるぞ」「ニヤー」

「このままでいいです」ガクブル

「・・・ハハハ」(汗)

「ついたぞ」

「へえ、ここにシエアクリスタルがあるのか」

「この国にも、まだこんな綺麗なところが残ってたんですね」

「シエアクリスタルがある場所だけ、けどね」

「それって、どういうこと？」

「この世界の土地はもうほとんど死んでいるということだ」

海男はそれに続いて

「土地が失われるということとは女神が国を守護する力が殆ど無い証拠なのだ。オレは考えている。そもそも、ゲームギョウ界の国というのは守護女神ありきで存在しているのだが」

「それは、私達の国も同じだね」

「しかし、そこ女神のちからの源は人々の信仰心だったという。人はいないこの世界では、もはや女神は本来の力を発揮できないだろう。そして、各地に眠っているシエアクリスタルは過去に存在していた人々の信仰心の結晶なのかもしれない」

「女神と国民は、互いに持ちつ持たれつの関係で国をつくっているんですよね。前に冒険した、別の次元のゲームギョウ界でもそうでした」

「じゃあ、ゲームギョウ界自体はどこも一緒なんだね」

「なら、説明がしやすくて助かるよ。ロト」

「…俺が調査したところ、この世界にはこの国しか存在していない。山や海の間には何もなかった」

「やっぱり、そうなのか」

「うそー!? それじゃあ、冗談抜きにリアル世紀末状態!?？」

そんな言葉が可愛く聞こえるほどだがな

「…話を戻すよ。しかし、女神であるうずめがいるのにかかわらず、緩やかにだがこの国も大地諸々滅びようとしているのは、何故かわるかい?」

「…いえ」

「シエアの供給をシエアクリスタルに依存しているうずめでは、世界に女神として認められていないのではないかと予測しているんだ」

「そんな!?？」

「……っ」

そして俺が

「すでに女神が存在していないこの世界は、ゲームギョウ界ではないのかもしれないというわけだ。

そして、その世界最後の国であるここが滅びるとこの世界はどうな

る?」

「……なくなっちゃいます、よね」

「そんなこの世界にあえて名を付けるとしたら

——零次元、だな」

「だけど、俺は絶対諦めねえ。」

世界に認められてなかるうが、あいつら俺を女神として慕ってくれてんだ、最後まであがいてやるさ」

まったく、律儀な奴だな

「話を戻そう。この場所が自然豊かなのは、この森全体にシエアクリスタルの影響を受けていて、まだ死んでいないからさ」

「故に、自然豊かな所はシエアクリスタルがある場所ということだ」

「で、付け加えるならここはでかい森だろ?つまり、それだけ強い力を持ったシエアクリスタルがあるってことさ」

「じゃあ、こここのシエアクリスタルを持って行ったら、この森枯れちゃうの?」

俺と海男は頷く。

「ああ、だからいくつか残していくんだ」

「良かったあ。」

それなら、今度お花見にこれるね」

「お、お姉ちゃん…。」

海男さんやロトさんが重い話してたのに、そんなこと考えてたんだ」

「わかってないなー、ネプギアは。」

こんな状況だからこそ、お花見みたいな日常的な娯楽が大事なんだよ」

「…そうだなねぶっち。」

デカブツを倒したらみんなで花見に来るのも悪くないな」

「でしょー。うずめわかってんじゃん」

ネプテューヌたちが騒いでいると

「……今度かあればの話だな」

「え……?」

「さつきも言っただろう。この世界はかなり危険だ状態だ、いついきなり、崩れてなくなるかわからんうえに、デカブツに負ける可能性だってある」

俺の言葉に皆静まり返った。

「も、もう！なんでそんなネガティブなの！」

「本当の事だろ」

「だからってなんでそんな後ろ向きなのさ。もっと前向きに生きようよ！」

「俺は現実を受け止められない奴らとは違うんだ」

「もおー、せつかく明るい雰囲気だったのに、ロトのせいで台無しだよ！」

「そいつは失礼なことをした、謝るよ」

「ムキー!?？」

「落ち着いてお姉ちゃん！」

「ロト！」

「…ハア、先行くぞ」

「待てよロト！」

第五話

ネプテューヌたちと話した後、俺はネプテューヌたちより数歩前を歩いている。

「まったくもう！」

「お、お姉ちゃん」

「ハハハ…。でも確かにロトの言ってることも間違っではない」

「それは、わかってるけどさ。いちいち言わなくてもいいじゃん」

・・・フンツ

—————

途中、何度かモンスターと戦いながらも進んでいると、

眉毛の濃い犬のような顔したスライム、スライムが現れた。

「やあやあ、うずめ、久しぶりぬら〜」

「おおつぬらりんじやないか。久しぶりだな」

「もしかして、このスライムもうずめの知り合い？」

「ああ、こいつも俺たちの仲間だ。名前はぬらりんっていうんだ」

「へえ、そうなんだ。」

ほらー、ぬらりん、こっちおいで」

するとネプテューヌがぬらりんを撫で、ぬらりんも気持ち良さそうにする。

「・・・」

「ん？なに〜？ロトも撫でて欲しいの？」

「いや、別に」

よく、スライムを素手で撫でられるなど思っただけだが。

「またまた〜、そんな照れなくても言ってくれたら、撫でてあげるのに」

「だからいいと言っているだろう」

「じゃあ、お、俺が撫でてやろうか？」

「いや、なぜそうなる。それに、もし撫でられるならネプギアの方がい

い」

「なっ!?!?」

「えええ!?!?わ、わたしですか!!?」

「もしもの話だ」

「そんな、でも・・・」

「・・・聞いてないな」

「ムウー」ぷくー

「・・・どうした?」

「なんでもねえよ!ロトのアホ!!?」

明らかにうずめは怒りながら歩いて行った。

それに俺たちを続ける。

「ついてくんじやあねえよ!」

「・・・なら、今から別行動にするか」

「だ、ダメだ!勝手に離れんじゃね!」

どっちだ

「ふん!」

(ハハハ:変わらないなロト)

(鈍感だねえーロトは)

(ロトさん、気づいてないのかな?)

なんだか、視線を感じる。

「何をしている、はやくシエアクリスタルを探しにいぐぞ」

「はーい」「わかりました」「わかった」「フンッ」

「僕忘れられてないかぬら〜」(泣)

「んー、どこにも無いなあ。ぎあっち、そっちはどうだー?」

「こっちには無いみたいです」

「ねぷっちの方は?」

「もうダメ:疲れた:。わたし、もう一歩も動けない」

「なら、置いていくか。うずめー!一人分食料浮くぞー!」

「やめてー!?!?」

「……」

「……ないみたいだな」

「うずめ。ねぷっちもお疲れのようだし、この辺りで少し休んではどうだい?」

「そうだな。先は長そうだし、一先ずここでー」

「ぬらー!ぬらー!」

「???どうしたんだ、ぬらりんそんなに慌てて?」

「シエアクリスタルを見つけたぬら!一緒に来て確かめて欲しいぬら」

「ほんとか!?ちなみに、デカさはわかるか?」

「今まで見たことのない大きさだったぬら」

「よし!なら、ようやくデカブツを倒すことができるってもんだぜ」

よかったですね、うずめさんとネプギアがうずめに話しかける。

「……」

「ん?どうしたんだい、ロト?」

「:いや、この場合、大概この後面倒なことになるなっと思っつてな」

「:不吉なことを言わないでもらえないかな?」

「それはすまん」

「ーって、カツコイと思わないか海男!ロト!」

「……ん?」

「すまんが、話を聞いていなかった。もう一度言ってくれないか」

「まったく、だから、仲間たちの力を借りてみんな同時に女神化とか、アニメや特撮みたいでカツコイイと思わない!ううん絶対思うでしょう!」

また口調が戻ってるな

「そうかもな」

「でしょー!」

まあ、無理だろうけどな。

「……ん?みんなで女神化?」

「おい、うずめ。それってもしやー」

☒四人”で女神化なんで最高にカッコイイよね！」

あ

「え……？四人？」

鳴く呼

「うずめ」

「えへへく。ん？どうしたの海男？」

「ロトの秘密」

「ロトの？………あ」

「ねえー、ねえー。どういうこと、うずめ？私たちの他にも女神化がいるの？」

「い、いやくな。……ねぶつちたちには言っていないけどな」

はあー、アホうずめ。

「ロトも女神化できるんだよ。」

「えっ？えー……!!?!」

はあー。

「どういうこのなのロト！」

「知らん」

「え？」

「原理はわからないが、五分だけ女神化出来る」

「そうなんですか。………いたいという」

「じゃあ、ここで見せてよロト」

「断る。誰が、好き好んでやるか」

「まあまあ、そんなこと言わず」

「まあ、デカブツと戦うときは変身してもらおうけどな」

なに？

「聞いてないぞ、うずめ」

「え？いやだつて相手はあのデカブツでぜ？悔しいが、簡単に勝てるようなやつじゃねえ」

「それでも、断る」

「そお、いなよー」

「断る」

「…そうはいつでも、なんやかんやで女神化してくれるよなロトは」
「…何のことだ」

「へえ、ツンデレなんだねロトは」

「黙れ、駄女神」

「ひどい！」

「あはは！」

(ほう。奴ら何か企んでいるのか…)

…ん？

「どうした？ロト？」

…。。

「何でもない」

第六話

俺たちは、ぬらりんに連れられシエアクリスタルのある場所へと向っている。

「みんな、うずめを連れて来たぬら〜」

「お前たちが見つけてくれたんだってな、ありがとな」

「あ、うずめさんぬら」「うずめさんが来たぬら〜」「待ってたぬら、うずめさん」「うずめさんにお礼言われて、嬉しいぬら」

「おおーっ!?!フレンドリーなスライヌがたくさんいるよ!?!?」

・・・あの『鋼スライヌ』、若本…。

いや、やめておこう。

「それで、見つけたシエアクリスタルってのはどれだ?」

「これぬら。ここを見て欲しいぬら」

ぬらりんがプルプルと示す方向には。

かなり大きいシエアクリスタルがあった。

「おーっ!間違いないえ、シエアクリスタルだ!」

「しかも、この大きさ…。うずめ、これはいけるぞ」

ああ、フラグがたつてゆく。

邪魔立てフラグがたつてゆく。

「ああ、感じるぜ。こいつには相当な量のシエアが凝縮されてる」

必ず、~~××~~さっきの奴がくるな。

はあ、構えておこう。

「ありがとうな、みんな。これでやっと、あのデカブツを倒すことができるぜ」

ーーならば、この場で潰させてもらおうでわないか。

ほら、来た。

すると突然地面が揺れだした。

!!そして、突如現れた、デカブツ。

『!!!』

!!ああ、こいつか。

俺は、さっきの声の奴がでてくると思ってたんだがな。

「そ、そんな!? どうしてこのタイミングで!?」

「狙いは、うずめか、それともシエアクリスタルか」

「どっちでも構わねえよ。むしろこの展開、願ったりだぜここでデカブツをぶつ倒す! ねぶつち、ぎあつち! 付き合ってもらうぜ」

「死亡フラグか?」

「何でそうなんだよ!」

「いや、『付き合ってもらおう』と言ったじゃないか。『俺、帰ったら』的なヤツかと思っただが」

「そんなわけないだろ!!」

「ええ! うずめにそんな趣味が!」

「ねぶつちまで何言ってるんだ!? そ、それに俺は口トの方が(ボソボソ)」

「ん……? うずめ?」

「な、何でもねえよ!」

「そんなこと言ってる場合じゃあないですよ!」

「く、くそう。お、おいデカブツ! テメエとの因縁も今日で終わりだ! テメエを倒す為に編み出したこの技、さっそくだが、試させてもらおうぜ!」

「おっと、そうはいかないな」

バアン!?

パキッ

「なっ……!?」

パリーン!

突然の攻撃によって、うずめが持っていたシエアクリスタルが破壊された。

「そ、そんな……。こんなことって……」

鳴く呼、うずめが大声であんなこというから

「俺のせいだっていうのかよ!」

「……ん? もしかして、聞こえていたのか」

「ハッハッハッハッハ! いい気味だな、小娘」

「誰だ、テメエ……!」

「そう言えば、こうして貴様と会うのも初めてか。…ならば、教え「いえ、結構です」て…なっ！」

「どうせ、いつか負ける敵キャラの一人なんだ、覚えるだけ時間の無駄だ」

「うわゝ、身も蓋もないね」

「ぐぐぐ、おのれ!!?!こいつらをやってしまえ!!?」

「マ、マジエコンヌ?!?」

俺の言葉に激怒して、叫ぶ白い肌の紫魔女。

その魔女をみて、驚愕の声を漏らすネプ姉妹。

「…知り合いか?」

「いやー、知り合いつていうか、因縁の相手にされることが多いつていうか。始めてのみんなの為に説明しよ「後でいい」ええ!?!」

「悠長に説明を聞いている暇はない。知らない奴にはググらせておけ」

「あつうん、わからない人はググってね!」

「二人とも、そんなメタイ事」

「ぐぐぐ、またもや貴様…つ?!?ふ、フンツ、まあいい、そのクリスマスルで何かをたくらんでたようだが、残念だった」

…チツ、確かにクリスタルを壊されたのは痛いな。

「さあ、ダークメガミよ、小娘共を皆殺しにしてやりな!」
すると、デカブツ。

ーダークメガミが、魔弾を放ち始める。

ヒューッイン。

ダダダダダダッ!!!

「きゃああああ!」「うわああああ!」「ぬらゝ!?!」

「ちよ、ちよつとたんま!こんなマップ兵器、反則だよ!スポーツマンシップはないの!?!」

「言ってる場合かつ!!?」「ねぶっ!」

ダーンッ!!!

俺は、マジエなんとかに向かって叫んでいるネプテューヌを抱いて飛び、ダークメガミの魔弾を躲す。

「くそっ!」

「ろ、ロト、ありがとう」

「気にするな。それより、早く立て」

「う、うん…」

チイツ、どうする？

「ハーツハツハツハ！いい気味だな、小僧。さあ、ダークパープルよ、やっつけていまえ！」

「が、助けてー」

ヒューイン。

ドドドドドドツ!!!

「…くそっ！フィールドを展開するだけの力があれば！俺にもっと力があれば、あいつを倒せるのに…ッ！」

「…うずめ！俺がダークメガミとやらの相手をする！お前たちはその魔女をやれ!!？」

「なっ!?何言ってるんだロト!!」

「そうですよ！一人じゃ無理です?!?!」

「今はそんなこと言ってる場合じゃあないだろ！それに倒すつもりは、さらさらない！少し、時間を稼ぐだけだ！」

「そ、それでも「うずめ！」ッ！」

「お前には、力がある！妄想しろ！勝利を、お前たちに都合の良い展開を!!？」

「…ッ！」

「何をゴチャゴチャ言っている。やれ！ダークパープル！奴らを皆殺しにししろ！」

「させるか！【来たれ、正義の雷】」

俺はダークメガミに右手を向けて叫ぶ。

ーライ、デイイイイン!?!?!

すると、俺の右手から雷魔法!「ライデイン」が放たれる。

バリバリバリッ、チュツドーン!?!?!

放たれた雷はダークメガミに直撃し、爆発を起こす。

『?!?!』

さすがのダークメガミも雷をモロに受けてただでは済まず、少しだ

け怯んだ。

「な、なに!?？」

「今だ、うずめ!俺もそう長くは持たん!」

「…ツ!わかった、ロト!!お前も、危なくなったら逃げろよ!」

・・・フツ

「了解した。…さあ、こい!デカブツ!!?お前の相手は、こつちだ!」

俺はダークメガミに叫びながら、うずめたちから離れるような走る。

ダークメガミは俺の言葉に反応して、追ってくる。

「お、おい!どこへ行く!戻ってこい!」

「お前の相手は俺達だ!」

第六話 女神 VS マジエコンヌ

くそっ！

とは言ったものもどうすれば…ッ！

ー！妄想しろ！勝利を、お前たちに都合の良い展開を!!？
妄想しろっていったって何を妄想すれば。

…ロトが言ったんだ、妄想しろって、だったらしてやる、俺たちの勝利を、都合の良い展開を!!？

ー！仲間の力を借りて、みんなで女神化するのって特撮みたいでカッコイイよね！

……ッ！

「ど、どうすれば。．．．え？」

「どうしたのネプギア？」

「お姉ちゃん感じるよ！」

「感じる？感じるってなにを．．．あれ？．．．これは」

「シエアエネルギー!?!？」

二人を感じたそれは間違いなく、女神の力の源である信仰心。

ー！シエアエネルギーだった。

「な、なんで突然？」

「ネプギア！あれ！」

ネプテューヌが指差す方向には。

「…もうダメぬら、おしまいぬら」

「諦めちゃダメぬら。うずめなら、うずめたちならきつと何とかしてくれるぬら…」

「そうさ。これまでだってなんとかしてくれたじゃない。

それに、今日は仲間が二人そしてロトさんだっているぬら」

「…そっか、スライヌたちの想いがシエアエネルギーとして流れてきているのだね」

「たぶん、そういうことだね！」

「な、なんだと!?!」

ネプテューヌたちの突然の変化にうろたえ始めるマジエコンヌ。

「これなら…ッ！」

「…うん！」

「戦える!!」

二人は顔を合わせ頷く。

「行くよ、ネプギア!!」

「…うん!!」

「刮目せよ!!／刮目してください!!」

すると、ネプテューヌとネプギアの二人が紫色の光に包まれる。

光が止むと、そこには。

片方は濃い紫色の髪に黒を基準としたレオタード。

そして、女神のみが身につけられる装備『プロセツサ・ユニット』を身に付け、女神の武器となった太刀を持った、スタイルの良い美女。

女神化したネプテューヌ。

プラネテューヌの女神『パープルハート』

そして、もう一人

今度は、ネプテューヌと違い薄い桃色の髪に白いレオタード。そしてネプテューヌとは異なる『プロセツサ・ユニット』に大きな銃剣を持った美少女

女神化したネプギア。

ネプテューヌの妹で、女神候補生『パープルシスター』

「女神の力、見せてあげるわ!／見せてあげます!」

今、二人の女神が再臨した。

「な、なんだ、貴様たちのその姿は!?」

二人の女神の出現によってうろたえるマジエコンヌ。

それに対し、二人は。

「女神、パープルハート!ここに参参!」

「同じく、パープルシスター、ネプギア!女神候補生だからって、甘く見ないで下さい!」

「貴様ら、女神だったのか!」

「あれが、変身したねぷちたち…。へっ!だったら俺もやる事は一つだ!ぬらりん!お前らの想い、使わせてもらおうぜ!!変身ッ!」

そして、うずめも女神化する。

すると、そこにはオレンジ色の髪に白を基準にしたレオタードにプロセツサ・ユニット。そして右腕に円盤状の装置。左手には、女神の武器となったメガホンを持った、ほんわかした雰囲気的美少女。

女神化した、天王星 うずめ。女神、『オレンジハート』の再臨である。

「いくよ！オバサン！」

「く、クソォー！おのれ女神!!？」

マジエコンヌはうろたえながらも槍を『コール』し構える。

「ハアア！」

ガキンツッ！

まず、パープルハートである、ネプテューヌが仕掛けた。

女神になったことで何倍にも上がったパワーとスピードで剣を振る。

マジエコンヌはネプテューヌの斬撃はなんとか防ぐが、敵はネプテューヌ一人ではない。

「やあああ！」

「うぐあー！」

マジエコンヌがネプテューヌの攻撃を防ぐことで生まれた隙を突き、ネプギアが銃剣で斬りつける。

「オリヤアア!!」

ネプギアの攻撃により怯んだマジエコンヌにうずめが追撃する。

「うわあああああ！」

うずめの攻撃により吹き飛んだマジエコンヌ。

「ひ、卑怯だぞー！一対三など!!」

「最初にダークメガミを連れて仕掛けてきたあなたに言われたくないわ。さて、あまり時間がないの早くロトの所に行かなくちゃいけないの。だから、これで決めさせてもらおう！」

ネプテューヌ、ネプギア、うずめが自分が持つ最も得意な技を放と

うとする。

「ま、まてー！」

「^{おわり}三終わりよ／です／だよ!!」

「ハアアアアア! 『クロスコンビネーション』!!?」

「いきます! 音速剣技 『ミラージユダンス』!!?」

「いくよー! うにやあああ!!?」

「う、うわあああ!!!」

ネプテューヌの連続斬り『クロスコンビネーション』、ネプギアの舞のような斬撃『ミラージユダンス』、うずめのメガホンによる咆哮、『咆哮夢叫』。

三人の女神の必殺技をくらったマジエコンヌは数十メートルほど吹き飛び動かなくなった。

「よし、行きましよう」

「はい!／うん!」

私たちは、ロトの待つ方に向かって飛びだした。

第六話 ロトvsダークメガミ

うずめたちが、魔女と戦うための時間稼ぎのためダークメガミを惹きつけて走っている俺。

(だが、大きさにすぐに追いつかれてしまう。……よし、【風の精霊よ、我が身に地を駆ける獣の如き速さを宿したまえ】——『ピオラ』)

魔法で素早さを上げ、本気で駆ける。

ダークメガミと少しずつだか、距離を離し始める。

(このまま、少しでもと遠くに離れるんだ)

ヒューイン。

(・・・まさか)

ドドドドドツ!!!!

(チッーやはりかー)

突然、ダークメガミが魔弾を弾幕のように射出し始める。

ドドドドーン!!!!

俺はなんとか、魔弾を避けながら走るが、正直ジリ貧である。

(仕方ない)

俺は、突然立ち止まり後に振り向き、愛剣をコールする。

鏢がロトの服の胸部にある鳥のようなマークに似ているこの剣の名は『ロトの剣』。

気づいた時には既に持っていた上に馴染んでいた剣である。

その剣の柄を両手で握り、剣先を相手に向けて顔の横に並べるようにして構える。

「・・・戦闘開始」

その言葉と共に駆け出す。

駆けだす途中、バイシオンやスカラなどの補助魔法で身体能力を上げる。

ダークメガミもただ見てるだけではなく、魔弾を放ち始める。

俺は、魔弾を避けながら進みある程度の距離になると、跳ぶ。

まずは、小手調べだ。

「・・・くっえ、火炎斬り！」

炎を纏った剣を振るうが

ガキーン！

弾かれたっ!?

『!!』

俺が怯んだ隙について、ダークメガミは蹴りを放つ。

「な、チイツー！——うぐう！」

ダークメガミの蹴りを剣の腹で防ぐが吹き飛ばされる。

吹き飛ばされて地面を転がる。

「・・・クソッ！」

俺は、再度剣を構えて駆け出す。

ダークメガミはまた、魔弾を放つ。

「ハアアアアア!!」

ブンツブンツブンツ！パリンパリンパリンツ！

(また、この攻撃・・・まるで機械だな)

ダークメガミが放つ魔弾を斬り伏せながら近づくとまたもや、ダーク

メガミは蹴りを放つ。

「何度も同じ手はくわん」

俺は蹴りを放ったダークメガミの脚に乗り一気に駆け出し腰あた

りまで登ると、腰を蹴って腕に向けて跳び、手の甲に剣を突き刺す。

『!!』

!!痛みは感じるのかそれとも純粹に振り落とそうとしているのか、暴

れだすダークメガミ。

俺は、ダークメガミの動きが静まった瞬間、剣を抜き走り出す。腕

の上を走る俺は二の腕にまで来ると一気に肩に向けて跳び出す。

「ゼヤア!!?」

そして、肩に乗ると、今度はダークメガミの頬を斬りつける。

『!!』

すると、今度はダークメガミが反対の手で俺を潰そうとするが俺は

その手に向かって跳び手の甲に剣を突き刺す。

『!?!?』

ダークメガミは痛みで手を振る。

俺はその衝撃で宙に飛ばされるが、空中で先程の構えを取り、そのまま、ダークメガミの額に突き貫く。

『………』

額の痛みには思わず、悲鳴をあげるダークメガミ。

「…ッ!!」

今がチャンスだ!!

俺は剣を抜くと、少し後ろに飛ぶそして、空中で剣を天にかざすと剣の刀身には雷が落ちる。

「ハッアアアアア、ゼヤアアアアア!!!」

俺は雷を帯びた剣『ギガスラツシュ』を振り下ろす。

ザシューウー!!!

『あ、あ、あ、あ、あ、あ?!?』

ギガスラツシュをくらったダークメガミの体に大きな傷ができ、大きな悲鳴をあげる。

「これなら…」

『!!!』

「升イ!しつこい奴だ!?!?」

すると

「ロト!?!」

やっと来たか。

「遅いぞ、うず…め…」

「…?どうしたのロト?」

俺が振り向くとそこには、紫色をした髪

の美しい女性がいた。

第六話 女神四人 VS ダークメガミ

「……」ポオー

「どうしたのロト?」

うずめたちと合流したロトは、うずめたちの方を振り向いた瞬間、
一点、女神化したネプテューヌを凝視したまま動かなくなった。

「おーい!ロトー!!」

「…………ハッ!」

「どうかしたのですか?」

「…何でもない」

様子のおかしいロトを見て疑問に思う、うずめとネプギア。

だが、ネプテューヌは。

(もしかして)

「あら、もしかして見惚れてしまったのかしら?」

「なっ!そ、そんなわけないだろ!」カアアア

顔を赤くしながら、焦って否定するロト

……正直言つて、凶星なのがバレバレである。

うずめたちは理解した、ロトが女神化したネプテューヌに一目惚れ
したのでと。

だが、それを良く思わない女神が一人。

「ううううう…:ツ!」プク

うずめである。

「フッフ、顔を赤くして。……かわいい」

そして赤くなったロトをからかうネプテューヌ。

「…う、うにやあああ?!?!」

ムニユン

いきなり、大声を出してロトに抱きつくうずめ。

うずめの胸が当たり戸惑うロト、そしてうずめは

「お、おいうずめ、いきなりなにをー」

「ロトはうずめのものだよお?!?」

「え?」「は?」

突然のうずめの発言に呆けた声を出した三人。
だか、うずめは続けて。

「ロトはうずめのだもん！」

うずめとずっと一緒にいるんだもん!!?」

「あら。でも、ロトは私のことが好きなようよ?」

「そ、そんなことないもん!!?」

「う、うずめさん、お姉ちゃんも」

『…………』

突如口喧嘩しだすネプテューヌとうずめ。

喧嘩する二人とどうしたらいいのかわからずオロオロしてるネプギア。

俺たちの会話が終わるのを律儀に待つダークメガミ。

……カオスである

「……はあ、うずめ!話は後だ、今は奴の相手をするぞ」

カオスな雰囲気に戻って冷静になったロト。

「え?あ、う、うん」

(忘れてたなこいつ)

「よ、よおーし!!シエアリングフィールド展開ツ!」

すると、うずめの左腕の円盤状の装置からオレンジ白のシエアが放たれ強く発光する。

放たれた光は俺たちやダークメガミを飲み込み。

シエアによってつくられた空間に移動させる。

「ここ、は……?」

「……ッ!これって!」

瞳を開けたネプテューヌたちが見たのは、幾つのも足場が浮いている亜空間であった。

「この空間……すごい。力が次々と溢れてくる」

「作戦、大成功!空間に取り込めたよ!」

「包み込むって聞いてたけど。まさか空間を丸々一つ作りだすなんて……。これもシエアエネルギーの力だっていうの」

すると海男が。

「シエアエネルギーを媒体に、うずめの能力で形成した亜空間さ」

「うずめの能力…?」

「よおーし!!ロトロー!!!」

「・・・はあ、やってやるよ!!!」

ロトは掌にパソコンやゲーム機の電源マークをした、結晶が現れる。

「…変身」

ロトは、その結晶を自分の胸に入れた。

すると、ロトが赤い光に飲まれる。

光が止むとそこには、

刃のように鋭い眼、後頭部で髪を結んだ少し色が薄い金髪。うずめやネプテューヌたちのようなレオタードはなく。胸部、両腕、腰、両脚に赤色で金色のラインが入ったプロセッサ・ユニットを身に付け。

ロトの剣を肩に担ぐ、『美人』がいた。

「・・・」

「え、ええ?!」

「ろ、ロト!!」

じよ、女性になってます!?」

ロトの変化に驚愕する二人。

それもそのはず、なんせロトは今、正真正銘女なのだから。

小さいが胸だつてある。

「ほ、本当にロトなの?」

思わず聞いてしまったネプテューヌ。

それに対してロトは。

「・・・ああん?」

「え」

「今まで一緒にいただろうが、ふざけてんのか貴様」

突然、人が変わったかのようなロトに、キョトンとする、ネプテューヌとネプギアの二人。

「まあいい、ほらうずめさつさとあの木偶人形を潰して帰るぞ」

「オツケー!!」

「・・・チツ、やかましいやつだ」

そい行って飛び出していく二人。

「ねえ、海男。」

女神化したロトってああなるの?」

「ああ、そうだ。」

ロトは、女神化すると、凶暴性が増すうえに、気が荒くなる。できることなら、変身させたくはないし、本人もしたがるらないのさ」
「なるほど・・・」

「あと、女性になるのも嫌な理由の一つかもしれないね」

「ああ、やっぱりそれもものね。さてネプギア、私たちも行くわよ!」

「うん、お姉ちゃん!!」

ネプテューヌに続いて、ネプギアがダークメガミに向けて飛び出す。

「おせえぞ!!なにしていやがった!!?!」

「ご、ごめんなさい、ちよつと話を」

「ハア!?今の状況わかってんのか・・・よっ!!」

ネプテューヌに怒鳴りながらダークメガミの攻撃を剣で弾き返す

ロトこと『レッドハート』。

『終焉ヲ受け入れろ!』

だか、ダークメガミも黙ってやられるわねがなく。

ロトに向けて拳を放つ。

「ロトさん!!」

思わず、ロトの名を呼ぶネプギア。

だが。

「ぬぐううおおおーッ!」

ロトは、巨体を誇るダークメガミの拳をなんと受け止めたのだ。そのうえ。

「うつらああ!」

ダークメガミの拳を押し返したのだ。

「なっ!」

「嘘・・・!」

「さすがロト!」

それもそのはず、なんせロトが放った技は空間を超え距離の関係をなくす刹那の居合い斬りなのだから。

「……ほお。なら、とっておきのお見舞いしてやる」

ロトの次元斬により、慌てふためくダークメガミを見たロトは再度居合い斬りの体勢を構える。

そして、

「奥義……。【次元斬・極】!!!!」

ロトが技名を叫ぶと同時に駆け出し、剣を強く握り振るいだした瞬間。

……ロトが消えた。

正確には、無数の分身を生み出し霧が消えた。

そしてダークメガミを襲う斬撃の嵐。

『あ……あ、あ……あ……あ……っ』

嵐のような斬撃をくらい動きが止まるダークメガミ。

すると、うずめたちの近くに背を向けた状態で現れたロト。

……終わりだ。

ロトはダークメガミに背を向けたまま剣を一度振るう。

瞬間、ダークメガミが斬り刻まれ倒れる。

「す、す……い」

思わず、眩きを漏らすネプギア。

三人の視線の先には、変身を解くロトの姿があった。

第七話

「フウー、フウー」

女神化を解いた俺は疲労とダメージにより膝をつく。

…くっ、さすがに限界だ。

女神化した上に奥義の一つである【次元斬・極】まで使ってしまうとは。

ただでさえ、奥義は体への負担も疲労でかいというのに。

…やはり、変身による性格の変化が問題か。

「やった、の…?」

「ええ、私たち、あいつに勝ったのよ」

その言葉を聞き喜ぶうずめ。

するとネプギアが。

「大丈夫ですか?」

「ロトさん」

「…気にするな…と言いたいが。

少し休ませてくれ」

「はい、わかりました!」

…

「元気なのわ良いことだが、少し静かにしてくれないか?」

「あ、す、すいません」

(やっぱり、女神化した時と全然違う。けどなぜ男の人の筈のロトさんが女神化できるの?)

俺は疲労した体を休ませる為に横になり意識を沈める。

「大丈夫、ロト?」

「…」

「ろ、ロト?…ねえ、ロト、…ロトってば!!!!」

「うずめ!お、落ち着いて」

返事をしないロトに顔を青くして、しまいには泣き出してロトを揺らすうずめ。動揺するうずめを見て、困惑するネプテューヌとネプギア。

そして、多くの笑い声が公園のいたるところからし、こだまする。
うずめたちの勝利を祝うように。

そして、ロトは

(・・・うるさい) イライラ
眠れずにいた。

第八話

ネプギア side

私たちはダークメガミとの戦いの後、少し休憩してから、うずめさんの拠点に移動しました。

「ふう、一時はどうなるかと思ったけど、勝ててよかったね」

「そうだね。でも、なんで急にシェアが、得られるようになったらう？シェアって、人間からしか得られないはずだよ？それに、ロトさんが女神化したことだって…」

私が悩んでいると海男さんが。

「それは、俺が説明しよう。」

…と、そのまえにうずめはどこだい？」

「うずめさんなら、ロトさんを連れて行くために寝室に行かれましたよ」

「なら、好都合だ、これから話すことはうずめに聞かれちゃ困るからね」

「それって、どういうことですか？」

私は海男さんの言葉に疑問を持ちどうということなのか聞いた。

「…うずめには、ある特殊能力があるんだ」

「特殊能力?！」

お姉ちゃんが思わず話す。

それに、答えるように海男さんが。

「彼女には、妄想を現実に変える力があるんだ」

「それってつまり、世界の事象に干渉できる、ってことですよ？けど、そんなことできるんですか?」

「さすがに、大規模な事象への干渉、改変はできないけれど、彼女にはその力があるんだ。二人にも心当たりはないかい？彼女が妄想したことにより都合の良い結果が起きたことを」

「あ、もしかして、プリン材料ですか!?!？」

「そうだ。あの彼女は妄想し、望んだんだ。君たちとプリンを作って食べることを。だから材料を手に入れることができたんだ。そし

て、今日も彼女はあの場所で妄想し願った。オレたちモンスターから信仰心を得られることにより、三人で共に女神化することを」

「だから、急にシエアを得られるようになったんですか」

すると、お姉ちゃんが大きな声で喋る。

「凄いじゃん！」

超チート能力じゃん！

…あれ？けど、どうしてそんな便利な能力を今まで使わなかったの？

上手く使えば、デカブツも倒せたんじゃないの？」

「この力は少々厄介なところがあつてね。うずめが本気で妄想しなければいけない以上、狙って発動させるところができないんだ。そして、それは彼女の妄想に込められた無意識な願いによつて、事象への干渉規模が決まると言つていい。だから、オレは君たち二人には本当に感謝している。うずめに、この世界のシエアの有り様を変えてくれたんだから。手遅れでなければ、この世界の崩壊も、止まってくれればいいんだが」

「そっか。だから、ロトはあの時あ言つたんだね」

「よく気付いたね」

「まあ、偶然つてやつ？普段、あまり無駄なことは話さないつて感じのロトが大きな声を出して話していたからちよつと気になつてたんだ」
「そういうことだから、この能力については、くれぐれもうずめには内緒で頼むよ」

第九話

「…あの、海男さん」

「ん？どうしたんだいぎあつち？」

「ロトさんについて聞きたくて」

すると、私の言葉にお姉ちゃんも反応する。

「そういえば！ねえ、ロトって女神なの？男だよね？」

私たちの言葉を聞き、少しだけ困った顔をする海男さん。

「ああ、…ロトは女神じゃない。純粹な人間で男さ」

「じゃあ何故ロトさんは女神化できるんですか？」

「…ん、正直言うと本人もよくわからないらしいんだ」

「わからないの？」

「ああ、だがオレが思うに、おそらくロトは女神の血縁者なんだと思う」

「血縁者…ですか？」

「ああ、この次元にもかつては多くの女神がいたからね、ロトはその誰かの子孫だと思うんだ」

「女神が子供を産んだってこと？でもさ、女神がそんなことしていいの？」

「さあ。あくまで推測だからね」

「ふくん、まあいいや。それにしてもロト強かったね！」

「あ、確かに。あのダークメガミと戦いもほとんどロトさんが戦ってたからね」

「うんうん、もうロト一人でいいんじゃないかなって感じ。けどさ、だったらなんでダークメガミと一人で戦ってた時に変身しなかったんだろう？」

「うん、いくら変身するのが嫌だったとしても変身した方が戦えると思うけど」

「…ねぶつち、ぎあつち」

「ん？なに海男？」

「いくら女神化できると言ってもロトは人間なんだ。」

本来、女神化とは女神のみが可能な変身なんだ、故にロトの女神化は君たちやうずめの女神化と違って、不完全なんだ、ちよつとしたことで変身が解けるような不安定な変身なんだ、そのうえ変身による疲労は君たちと比べて段違いに多い。そんな不安定なものを無闇に使うわけにはいかないんだ」

「・・・」

海男さんの言葉に思わず黙ってしまう私。
するとお姉ちゃんが。

「けど、デカブツと戦ってる時は大丈夫だったよ？」

「あれは、シエアリンクフィールドのおかげさ。」

あの空間はシエアで満ちているからね」

「なるほどねえ」

海男さんの返答に納得したお姉ちゃん。

「じゃあさ、あの離れた所を斬った技は？」

「あ、それ、私も気になってました。あの技はなんなんですか？」

「ああ、あの技はね【次元斬】っていうんだ」

「次元：斬？」

「ああ。」

あれは、超スピードで剣を振ることで、空間を斬り距離を超え離れた場所を斬る技だ」

「・・・」

私たちはロトさんが使った技に驚きを隠せないでいた。

「じゃ、じゃあさ、あの最後に使ったのは？」

あれも、次元斬って言っていたよね？」

「ああ、アレは【次元斬・極】

次元斬の上位の技でロトの奥義のひとつさ。」

シエアと魔力で分身を数人作り、全員で次元斬を放ち、敵に斬撃の嵐を浴びせる技だったかな」

「・・・」

私とお姉ちゃんは啞然とする。

私たちが我を取り戻したのはロトさんの寝室からうずめさんが声

をかけた後だった。

私とお姉ちゃんはロトさんが味方だったことに心から安心しました。

第十話

・・・ん。

此処は、俺は確かー

「…どうやら目が覚めたようだね」

海男…、ああ、そうか確か俺は女神化の反動で倒れたのか。

「気分はどうだ？」

「今更じゃないか？」

「確かにそうだね」

俺は、海男と談笑しながらベッドから降りる。

「もう、いいのかい？」

「ああ、問題無い」

「そうか。なら、オレは一足先にうずめたちのもとへ行くとするよ」

そう言うとき海男は部屋から出て行った。

俺は、いつもの服に着替え、部屋を出る。

俺がうずめたちがいる部屋に行くとき。

「ぐだあー…」

「こら、二人共。」

いつまでだらけているんだ？」

…干物が二つあった。

「…おはよう、ネプギア」

「ハハハ…、おはようございます。気がついたんですねロトさん」

「ああ」

俺はネプギアに声をかけ、ネプギアも苦笑いしながらも返事してくる。

「まったく、少しは若者らしくシヤキツとしないか」

・・・
「**若者**、ねえ。」

「だってえ、デツカいのと戦った時の疲れが取れないんだもん…」

「俺も、なんだか気合がはいなくてよお…」

「だるうー…」「ぐだあー…」

情けない奴らだな、まったく。

「おはよう、うずめ、ネプテューヌ」

「ああ、起きたんだロト」おはようロト、もういいのか?」「(キリッ)…え、うずめ?」

俺が声をかけた瞬間、いつもの調子に戻るうずめ。

まったく、こいつは。

俺が内心ため息を吐いていると。

「おい、何やってんだねぶっち。シャキツとしろよな、まったく」

「えー!?!」

さぞ、いつも通りを装ったうずめだが。

「さっきのお前も、たいして変わらないだろう」

「な、なananんのかかわからねえな」

こちらから顔を逸らして、しらをきるが。

「誤魔化せてない、誤魔化仕切れてない」

「き、聞こえねえなー!」

「はあ、まったく」

ハハハ…と苦笑いの表情を浮かべる海男とネプギア。

「…ネプギア、少し付き合え」

「え? 私ですか?」

「お前以外に誰がいる」

「…なあ、ロト。それってもしかして…デートの誘いか?」

いきなり、声のトーンを下げて言ううずめ。

急に冷たくなつたうずめに「はわわ!」慌て出すネプギア。

「そんなわけないだろ。仮にそうだとしても、こんな廃墟でなんか御免だ」

「…そっか、疑って悪かったなロト」

いつもの調子に戻ったうずめにホツとするネプギア。

するとー

「それに、俺は『女にも男にも興味ない』」

第十一話

急に叫んだうえに気絶してぶっ倒れたうずめを背負い、ネプテューヌ、ネプギア、海男と目的地の施設絵と向かう俺たち。

「…ふへへ、ふへ、ろくとく」すりすり

俺の背中ににへくと笑いながら頬ずりしているうずめに☒起きてんじゃないのか、こいつ☒と思いつつも黙って歩き、無事施設に到着した。

「…ついたぞ、起きろうずめ」

「う、うん？ふうあー…、もうついたのか？ん？なんで俺はロトに背負われてるんだ？」

「……気にするな。それより、目が覚めたなら降りろ」

「お、おう、よいしょ。…へえ、この街にもこんな場所があったのか。それにしてもなんだこの装置、動くのか？」

「オレも見つけた時は驚いたよ。まさか、ここまで綺麗な状態で残っているものがあると思わなかったからね」

すると、目を輝かせたネプギアが。

「あの、海男さん…ここ、調べちゃっていいんですよね！」

「なんの施設がわからないが、調べたところで困る人はもういないだろう」

「やったー！じゃあ、さっそくこのメインコンピュータやサーバーを調べさせてもらいますね」

と言ってる途中で機械に向かって走り出すネプギア。

(…: 剣の手入れでもするか)

ロトは待ってる間、剣の手入れで暇をつぶす事にした。

「どう、ネプギア。なんか面白いのあった？」

「…」

ネプテューヌの言葉技聞こえていないのか無視しているのか知ら

ないが返事をしないネプギア。

「おーい、ネプギアー」

「……………」

無視されてなお話しかけるネプテューヌ。

だが、それを更に無視するネプギア。

「ガーン！まさか、わたしがネプギアに無視された!？」

「今、ぎあつちはとても集中しているようだから、あまり邪魔はしない方がよいと思うな」

妹に無視されたのがショックなのか、大きな声で驚愕するネプテューヌとそのネプテューヌを鎮める海男。

「はあー…、ネプテューヌ、持ってきたプリンをやるから静かにしろ」

「ほんと!?!わーい!」

ロトが取り出したプリンを見て、飛び跳ねて喜ぶネプテューヌ。

「何故そんなものを?」

「これをやれば大人しくなるかと思ってな」

—————

「…あれ、まさかここって」

「なにになに?何かわかったの?」

ネプギアの言葉に反応するネプテューヌ。

「うん。てつきり、ここは通信系の施設かと思ってたけど、転送施設だったみたい」

「転送施設?」

「うん。…けど、これはあくまで近隣の街を行き来する程度のものだよ。それと、私の予測だけこの装置をみて、この世界の科学レベルじゃ次元を超える装置はなさそう」

「あー…。やっぱりそうだよね…」

「ごめんね期待させちゃって」

「この装置じゃ帰れない事に落ち込むネプギアに☒☒いって、い

「いって」と励ますネプテューヌ。
すると

「プルルルルル！プルルルル！」

突然、着信音が鳴った。

「ん？この音はなんだ？」

「これ、私のNギアの着信音です。けど、電波がないのにどうして…」
けれど、ネプギアのNギアは鳴り続ける。

「通信？誰から？」

「えと…」

ネプギアが確認すると。

「あっ！いーすんさんです！お姉ちゃん、いーすんさんから通信が来てるー！」

「ほんと!？」

「いーすん？誰だそいつは？」

「はい、私です！」

するとNギアの画面には。

『あ、ネプギアさんですか！良かった、やっと連絡がきました。ネプテューヌさんはご一致ですか？』

「はい、お姉ちゃんも一緒です」

「やつほー」と画面のいーすんに話しかけるネプテューヌ。

それにしてもこのちっさいのがいーすんか。

その後もしばらくネプテューヌたちと話すいーすん。

別の次元にいることに驚いていたり、自慢気に今の状況を話すネプテューヌに心配したり。

海男やうずめと挨拶したり。…途中、うずめに少しおかしな反応をしたが。

海男の比喻を間に受けたうずめとネプテューヌに互いに苦労している事に苦笑いを浮かべたり。

すると

『ところで、そちらにいる殿方は？』

…ん？

「ああ、こいつはロト」

「…ロトだ」

『えっ!?!』

……………???

俺の名を聞いた瞬間、驚き表情をするいーすん。

『まさか…あの…の一族?けど、……………は……たはず…。じゃあ、名…が……だけ?』

「…どうしたんですか、いーすんさん?」

ネプギアの言葉に我に返ったいーすん。

『す、すいません、少し考え事を』

「ふーん、何を考えてなの?」

『い、いえ、大した事じゃないのでお気になさらず』

ネプテューヌの疑問に誤魔化すいーすん。

俺はそんないーすんを疑っていると。

「ところで、いーすんさん。元の世界に戻る方法を知りませんか?」

『それでしたら、安心してください。ネプギアさんのNギアを仲介にして、そちらの世界の転送装置とこちらの転送装置をリンクさせることで、お二人を転送させることが可能です』

…ふむ、すごいな。

『…ただ、その代わりエネルギーとしてこちらの世界のシェアを消費するのでその点はご了承ください』

「帰れるんだったら。そのくらい余裕余裕。ネプギアが頑張ってくれるもんね」

「私だけ!?!」

ネプテューヌの無茶振りに驚くネプギア。

それに、注意するいーすん。

そしていーすんの言葉に帰る気をなくすネプテューヌ。

…あいつも大変だな。

俺がそう思ってる間に話は進んでおり、ここの転送装置を使って帰ることとなった。

「寂しくなるな」

「…そうだね」

「まあ、こっちは心配するな。」

「デカブツはすでに倒したし、あとは紫ババアを倒すだけだかな」

「…そうだね！それにまたこればいいしね！」

「ああ、じゃあな」

「はい、さよならうずめさん」

「……………」

「…なあ」

「ん？どうしたんだよロト。もしかして寂しくなったか」

「ん、いや、別れ挨拶の途中ですまないが」

「ん？どうしたの？」

「…その装置。――壊れてて使えないぞ」

「『『え？』』』」

「お、おい！どういうことだロト！」

「どういうことも何もそのままの意味だが」

「ほ、本当です。この装置、壊れていて使えません」

「もう、もつと早く言ってよ！」

『…困りました。装置が使えないとすると、他に方法が…』

「装置が使えないことを知って悩みだすーすん。」

「なら、私が直します。調べてみないとわかりませんが、あまり損傷はないみたいなので」

「さすが、わたしの自慢の妹だね！」

「ネプテューヌが自慢気にしていると。」

「ゾクッ!？」

「っ!？」

「突如、全身に悪寒がはしる。」

「俺は、急いで振り向くが誰もいない。」

「誰かに見られている？」

「ロト？……………どうしたんだ？」

「俺の異変に気付いた海男が話しかけてくる。」

「……海男。」

装置の修理には時間がかかりそうだから、少し出掛けてくる」

「今からかい？」

「ああ」

「…わかったよ。修理が済んだらこちらから連絡しよう」

「ああ、頼む」

俺は、そう言っただけで施設から出た。

第十二話

・・・うずめたちと別れて歩くこと一時間。
その間、ずっと感じてた視線。

「そろそろいいんじゃないか?」

俺は後から見ているだろう人物に話しかける。

「……そうだな、そろそろいいだろう。」

すると、聞き覚えのある声が聞こえた。

この声は『あの魔女』や『ネプテューヌたち』のような、最近聞いたモノではない。

もつと前から、聞き親しんだ声だ。

だが、【あいつ】はこんな冷たい声ではない。

「……………」

俺が声の方に振り向くとそこには

「……俺のよく知る『天王星 うずめ』にうりふたつの少女。違いがあるとするば、うずめと違い禍々しく、黒い。」

「……へえ、【オレ】の姿を見たのに驚かないんだな」

「……………」

「おいおい、無視か? 傷つくなあ」

「……おまえ、【うずめ】か?」

「……ああーオレもうずめだ」

黒い『うずめ』は「自分もうずめ」だと語る。

「……何の用だ?」

「用がないと会ってはいいいないのかい?」

「……………」

「……フツ、冗談さ。いや、単純に気になったんだ。本来、【俺】以外は
モンスターしかいないはずのこの次元にいる人間が、ね」

「……いるはずがない?」

「ああ、本来この次元は【俺】以外に人間は存在していない」

黒いうずめは俺を見つめながら話す。

だが、俺が気になったのは。

「存在していない、ね。」

「まるでこの次元の始まりを知っているようじゃないか？」

「ああ、知っているさ」

「・・・っ」

やはりか。

「じゃあ、ネプテューヌたちはどうなんだ？」

「あいつらは、ちよっとした手違いで入り込んだイレギュラーだ。だが、君は違う。君は、気がつくところの次元にいた。もし外から入ってきたのなら気づかないはずがない、だが君は気がつくところの次元にいた。さぞ、初めからいたかのように」

黒いうずめは語る、まるで誰かに教える教師のように。

「そして・・・」

・・・？

なんだ？

「君からは懐かしい【何か】を感じる。」

力のような、気配のような・・・。

いや、今君と話したことで少しわかった。

これは、【血】かな？」

「・・・血？」

「ああ、そうだ。」

「これは血、君の受け継いできた血だ」

血・・・。

転生者の筈の俺に『受け継いだ血』なんてモノがあるのか？

「さて、そろそろ本題に入ろう」

「・・・っ！」

「前のダークメガミとの戦いで君を見て思った・・・。

君は強すぎる、このままでは、【オレ】の計画に支障がでる・・・と」

「かといって、マジエコンヌじゃ君には勝てない・・・。

だから、オレ自ら戦う事にした」

「・・・それは光栄だな」

「さあ、行くぞ！」

黒いうずめは、うずめと同じメガホンをだして、向かってくる。

第十三話 VS 黒いうずめ

その場から跳び、こちらに接近してくる、黒いうずめ。

彼女は俺まで数メートルにまで近づくと武器であるメガホンを持っていない左の拳を握り、放ってきた。

俺は、その拳を剣を抜かずに腕で受け止めた。

すると、黒いうずめの拳を受け止めた腕が悲鳴をあげる。

「グッ!?!」

(なんでパワーだ、あの体格でダークメガミと同じもしくはそれ以上だ)

すると、黒いうずめはすぐさま右足で回し蹴りを放つ。

「…チッ!」

俺は、回し蹴りが当たるギリギリのところまで背後に跳んで避けた。

「ツ!…ハアア!」

そしてすぐさま黒いうずめに拳を放つ。

「…フツ」

黒いうずめは俺の拳を笑って回避した。

だが、想定内だ!

「……ツ!」

俺は突き出した拳を手刀にして横に振るう。

「…ハハツ」

またもや、笑って回避する黒いうずめ。

俺は、一度距離をとり拳を握って構える。

「…」

「…その剣は使わないのかい?」

「…なんだ、剣がいいのか?」

「いや、どちらでも構わないさ。さっきの戦いでよくわかった。…君じゃ勝てない」

「…ほお、言ってくれる。なら望み通り使ってやろう」

剣を呼び出し構える口ト。

そして、そんな口トを見ながら自然体で笑みを浮かべている黒いう

ずめ。

「…事前に言っておく。油断していると…殺られるぞ…」

「ハハ、面白い事を言うね君は」…忠告はしたぞ」…何を言っ…ナツ!？」

笑みを浮かべて突っ立っている奴に一瞬で距離を詰め、剣を振るう。

黒いうずめは高速で近づいた俺に驚愕し、俺の一閃をなんとか回避が頬に傷ができる。

「…くっ!だが「遅い」——うぐっ!？」

俺は最初の一閃の勢いを利用し、その勢いのまま二閃目を放ち、黒いうずめを斬りつける。

「くう…:っ!調子に、のるな!!」

奴は俺に一気に近づき拳を打とうとするが。

残念だったなそこは射程距離内だ。

「…ッ」

俺は、黒いうずめが拳を放つ前に三度斬りつける。

「?!?!」

奴は、俺の攻撃を受け、声にならない悲鳴をあげる。

「…っ!だったら!」

奴は、右手のメガホンを顔の前で咆えることで爆音による超音波を放つ。

「…チッ」

俺はその超音波を横に跳んで避け、黒いうずめに向けて走り出すが。

「……!!……!!……!!」

「…ッ!クソッ」

黒いうずめは超音波を連発するため接近をやめて距離をとって回避する。

いくらうずめと同じ技といえど威力も数も奴の方がが段違いに高いため、まともに受けるわけにはいかないのだ。

「…チッ。当たらないか、だったらー」

第十四話 VS 黒いうずめ II

「……ギヤツキン！」

ロトの剣とメガホンがぶつかり金属音が鳴り、互いに距離をとる。黒いうずめと戦い始めてから既に数時間が経っている。

「……」 「……ハハッ」

今までの攻防で互いにダメージを受けている。

そして、ロトよりも遙かに多くのダメージを負っているにかかわらず、黒いうずめは笑みを浮かべている。

(…クソツ、なんだ奴の異様なタフさは)

ロトは自分の攻撃の多くに手応えを感じていた。

だが、それを受けていた筈の黒いうずめにはダメージを負っているようには見えない。

決して、きいていないわけではない。

そして、攻撃を堪えているようにも見えない。

となると、ロトが考えたのは。

(……なんらかの方法で回復している)

という結論に至った。

「……」

(だが、問題は『どうやって回復しているか』だな)

「……考え事は終わったかい？さて、ならそろそろ再開しようか」

「……」

ロトは黒いうずめの言葉を聞くと構える。

「……ッ」「……ハハッ」

ほぼ同時に飛び出す二人、またもや剣とメガホンがぶつかり火花を散らす。

剣とメガホンでつばぜり合い、そして剣を振り払い、メガホンが宙を舞う。

武器を失い素手となった黒いうずめに剣を振るうが、黒いうずめは真上に跳び、ロトの一閃を回避する。

そして、ロトもすぐさま黒いうずめを追って跳ぶ。

先に跳んだ黒いうずめは、ロトに弾かれたメガホンを掴みして、ロトを見る。

ロトは黒いうずめより後に跳んだ為、必然的に見下ろされる形になる。黒いうずめはニヤリと笑い、メガホンを構え、スウーと息を吸う。

そして、

「うう…ッわああー?!?!」

大声で吠え、超音波を放つ。

「…フウ、ハアッ!」

ロトは向かってくる超音波を一刀のもとに斬り伏せ、両断する。

「…いやはりか」

「…なっ!」

向かってきた超音波を両断すると、黒いうずめはいなかった。

そして次の瞬間、ロトの背後から声が聞こえた。

ロトが急いで後を向くと拳を握り大きな振りかぶる黒いうずめがそこにいた。

「…」

「くらえ」

「…ッ…ゼヤアッ!!」

ロトはすぐさま剣を握っていない方の拳を放つ。

「ぐっ」

「うぐわあ!」

黒いうずめとロトの拳は互いくらうが、黒いうずめの方が深く突きささり、ロトが殴り飛ばされる。

殴り飛ばされたロトは後にあつた廃ビルにぶつかり、壁を突き破り、廃ビル内を転がる。

転がる勢いを利用し体勢を立て直す。

「……プッ!」

ロトは口元についた血を腕で拭き、口の中の血を吐きだす。

すると、ロトが突き破って出来た穴から、黒いうずめが現れる。

「フッフ、どうだい?降参する気になったかい?」

「…言ってくれる。…なら、今度は、こちらから行くぞ!」

剣を構え、黒いうずめへ走りだすロト。
遅れて、走りだす黒いうずめ。

「…ハアア！」

接近した、黒いうずめへ剣を横に振るうロト。

黒いうずめはその剣撃を跳んで避け、そのままロトを跳び越えて背後へと周り蹴りを放つ。

ロトは体を捻って蹴りを回避しその勢いのまま剣を振って斬りつける。

「…くっ」

「…ッ！くらえ！」

先ほどの一閃で怯んだ黒いうずめを斬り上げる。

斬り上げられた黒いうずめは天井を何枚も突き破り廃ビルから、飛び出す。

廃ビルを突き破って宙を舞う黒いうずめに近づいたロトは高速で剣を振るうことでほぼ同時に二回斬りつける技、「はやぶさ斬り」を放つ。

「あがつ！」

はやぶさ斬りにより生まれた隙。

そしてその隙をロトが見逃す訳もなく。

「…！覚悟はいいか。」

「…っ!？」

一気にたたみかける。

【三連斬り】！

「…西から、連続で三回斬りさく斬撃が」

【爆裂斬り】！

「…北東から、剣を逆手に持ち、刀身に魔力が迸る一刀が」

【メタル斬り】！

「…南西から、鋼鉄の鋼すら容易に斬り裂く一撃が」

【獣斬り】！

「…北から、暴れる獣を一撃で沈める剣閃が」

「あ、あが、はっ！」

瞬く間に様々な剣技を受けた黒いうずめは空中で浮いたまま悶える。

その次の瞬間。

ーードオゴオオン!!!!

雷の落ちる音が轟いた。

雷鳴は黒いうずめの真上から聞こえ、そこにはロトがおり、その彼の手には刀身に激しい雷電を帯びる『ロトの剣』が握られている。

「終わらせてやる!!?」

ロトは雷を纏った剣の柄を両手で握り、振り下ろす。

神すら滅ぼす勇者の一閃。

その名をーー

「ギガア、ブレイクウ!!!!!!」

それはロトが誇る奥義の一つにて『ギガスラッシュ』の上位技。名を【ギガブレイク】

第十五話

「フウ…フウ…くっくっ」

地面に着地したロトは膝をつく。

無理も無い、なんせロトは何時間も戦い続け、その上魔力の消費と疲労の大きい奥義を使ったのだ。

「だが、奴も【ギガブレイク】を受ければ」

「ー確かに、今は危なかったね」

「なっ!？」

ロトが声の方へ向くと、そこには服が所々破け、そこから見える肌には血を流しているボロボロの黒いうずめがいた。

「チィー！」

黒いうずめが生きていたことに驚き剣を構えるロト。

「そう、焦らなくてもいいさ。オレだってもう満身創痍だからね」

両手を挙げヒラヒラと揺らす黒いうずめ。

彼女から敵意は感じられない。

「だからその剣を降ろしてくれないか？そんな、モノを持たれちゃ怖くてしょうがない」

「おっけーハッ！」

(なんかおかしな電波が)

「…?」

ロトのおかしな行動に不思議そうに首をかしげる黒いうずめ。

「さて、じゃあオレは行くとするよ」

「…おまえは一体なんだ？」

「ん？最初の方に言っただろう。オレも『うずめ』だ」

「…そうか、ならおまえのことは『くろめ』と呼ばせてもらうぞ」
「くろめ？」

「黒いうずめだから、くろめだ」

「…………フツ、安直な名前だね。だけど『くろめ』…か。

いいな、気に入った。何より君が付けてくれた名だからね」

黒いうずめ、否『くろめ』はロトが自分に付けられた名が気に入っ

たようだ。

「それは光栄だな」

「フフツ、じゃあ今度こそオレは行くでしょう。」

「じゃあな、ロト。またの会う時を期待しているよ」

くろめは、笑みを浮かべながら闇に紛れ込むかのように消えた。

「・・・いったか」

ロトはくろめが去ったのを確認するとその場に座り込む。

くろめが目の前にいた為、余裕の振る舞いをしていたが正直限界

だったのだ。

「・・・少し休むか」

ロトは近くの廃ビルも元まで歩き、廃ビルにもたれて、目を瞑る。

『PPPPP!』

「...ん。」

「これは...海男からか」

眠っていたロトは無線機の着信音で目を覚ます。

ロトが無線機を確認すると、海男からの連絡だった。

『P!』

『やあ、ロト』

「...連絡が来たということは、修理は終わったのか?」

『ああ、だがいくつか問題があるんだ』

「問題?」

『ああ、実は...』

「できたー!」

ネプギアが転送装置を修理し始めて約九時間。

「ねぶっ!」

「ふああ。やっと終わったのか、待ちくたびれたぜ」

「それで転送装置は動きそうなの？」

ネプテューヌの疑問に困った顔をするネプギア。

「それが、直せるところは直したんだけど、二つ問題があつて…」

「問題…？」

「うん、この装置のコアになつてるパーツの劣化が激しくて、こればかりは取り替えないとダメみたい。他のは応急手当でなんとかつたんだけど…。私もまだまだだなあ…」

今の自分では転送装置の完全な修復ができない事実には落ち込むネプギア。

「…いや、十分凄いなと思うぞ。それで、もう一つの問題つてのはなんだ？」

「エネルギーがないんです。装置を動かすには大量のエネルギーが必要なんですけど、この建物にはほとんど電力が残っていないみたい」

ネプギアが二つの問題について説明した。

「なるほど、どちらも難しい問題だね」

「いや、パーツなら探してみようぜ。これだけ広い街なんだ、代用できそうなものがあるかもしれない」

「けど、エネルギーはどうするんだ？パーツの替えが見つかったも、エネルギーがないんじゃないぞ？」

「何言つてんだ海男、それなら問題ねえーよ。雷が使えるぴったしの奴がいるじゃねえか」

「雷が使える？」

「ぴったしな人…？」

うずめの言葉に疑問を浮かべるネプテューヌとネプギア。

「へへッ、なあロト!!」

.....

『.....』

「…あり？ロト？おーい、ロトー？おーい!!あり？どこいったんだロトの奴？」

「ロトなら、ぎあつちが修理し始めた頃に出て行ったが」

「なっ!?おい、聞いてねえぞ海男!まったく、こんな時にあいつは!」

『と、いうことがあってね』

いや、俺悪くなくねと思っただがあえて言わないロト。

今はそんな事より。

「…それで、何故ゲームセンターに行くことになったんだ」

☒こつちの方が大事なのだ。

『ああ、うん、ぎあつちがね』

「ネプギアが?まさか、ネプギアがゲームセンターに行きたいと?」

『いや、そうじゃなくてね。最近、ぎあつちの様子がおかしくてね。何か悩んでいるようだから、ちよつと息抜きにね』

「…:はあ、わかった。俺もすぐ行く」

『ああ、じゃあまた後で』

プツ…:ピーピーピー。

「はあー、さて行くでしょう」

ロトその場から立ち上がり、うずめたちが向かっているゲームセンターに向かった。

第十六話

「ついたか」

海男と通信を切ってから、一時間程歩くと目的のゲームセンターに到着した。

そのままゲームセンターの店内に入る。
すると。

『……のです』

うずめたちとは違う聞き覚え声が聞こえた。

(この声は確か、ひよこ虫だったか?)

声のした方に行くと、うずめたちがいた。

「うずめ」

「ん、おお！ロト、やっと来たか！」

俺が来たことを知ると、笑いながらこっちに走ってくるうずめ。

「どうかしたのか」

「いや、ここの機体は全部壊れて動かねえから、困ってたから、ひよこ虫が隣のゲーセンなら遊べるって行ってよ。

今から行こうとしてたんだ」

「なるほど」

「それじゃ、上手いことロトをきたし、隣のゲーセンにいこう！」

また、歩かされるのか。

—————移動中—————

俺たちは隣のゲームセンターに到着したのだが。

誰もいない。

「…おい、ひよこ虫。聞いてた話とだいぶ違うぞ」

うずめの質問にひよこ虫は焦りながら。

「おかしいのです。ここにはジゴクノトサカたちが棲んでいるはずなの……」

「おーいー」

すると突然、声が聞こえた。

声のした方には、ひよこ虫の色違いのモンスター、『ジゴクノトサカ』がいた。

「あ、トサカさん。これはどういうことなの？みんなは無事なの？」

「それが困ったことに、ちよつと前から凶暴なモンスターが棲み着いちやつて…。けど、安心して、みんな無事よ」

「よかったあ…」

トサカさん…とやらの言葉に安堵するひよこ虫。

すると、うずめが。

「よし、なら俺たちに任せろ！」

「うずめさん、お願いしていいの？」

（まあ、わかってたよ。こういう展開になるのは。わかってたけどさ、俺、少し眠ったとしても疲れてんだけど）

そんなことを考えている間に話は進み。

「いくぜ、ロト!!」

「…ああ、わかった」

俺は剣を抜き、モンスターの元に向かった。

—————カットオ!!—————

「…ッ！」

斬ッ！

『グワア!?!』

俺は、剣を振るいモンスターを斬り伏せる。

「これで最後か？」

すると少し離れたところからうずめたちの声が聞こえた。

「うし、こんなところか！」

「はあ…はあ…。うずめったら飛ばし過ぎだよ…。わたしはもうへト

へト…。」

「なんだ、ねぷっち。このぐらいでバテるなんてだらしないぞ」

「うずめが張り切り過ぎなんだって。ねえ、ネプギア」

「…へ？私は別にこのくらい慣れてるよ」

「ネプギアが裏切った！」

「…………ハッ、哀れだな」

「酷い!？」

ネプテューヌが落胆していると、トサカが。

「うずめさん、ありがとう！一族を代表して礼を言わせてもらおうよ」

「ふう、さてここからはまたいつもと同じような会話だからなカットだ」

「…どうしたんですか口トさん？」

不思議そう顔で口トを覗くネプギア。

「…可愛い」ボソツ

「えっ!？」

「あ、いや、何でも無い気にするな」

「え?でも今」

「気にするな」

「は、はい」

互いに顔をそらす俺とネプギア。

ネプギアの頬はほんのり赤くなっていた。

「ねえ口ト?」

突如背後から聞こえる冷たい声。

この声は、女神化したネプテューヌ?

「ねえ、何であなたとネプギアが顔を合わせないようにしてるの?何でネプギアの顔が赤いの?ネエ、ナンデ…」

(へたに誤魔化しても、殺られるよな)

「…いや、ネプギアが可愛いと思ってるな」

「えっ!？」

「え、なに、口説いてるの私の妹を?」

☒逆効果だったか”などと考えている口ト。

だが実際かなり焦っていたりする。

万全の状態ならまだしも、今はくろめとの戦いで疲労している、不可能では無いが大変だと。

その上。

「どうイウことダ、ロト?」

もう一人、面倒なのがいるのだから。

(流石にやばいな)

「なあ、ロト?／ねえ、ロト?」

そろそろ剣を抜こうとした、その時。

「お、落ち着いてください!!お姉ちゃんにうずめさんも!ロトさんも別に私を口説こうとしている訳じゃありませんし」

「え、そうなの?」

「はい!ねえ、ロトさん」

「ん、あ、ああ、どちらかと言えば今のネプテューヌの方が好みだ」

「・・・え」

「・・・え」

「あ、いや、その。それはそれで、う、嬉しいのだけれども」／／

ロトの言葉に赤くなった顔に両手を当てるネプテューヌ。

まさか、突然、面と向かって言われると思わなかったのだ。

「・・・え、あ...あ!」

ポカンとしていたネプギアは我に帰り、ロトの背後で俯いてプルプルと震えるうずめに声を上げる

「ロトさん!うしろ!」

「ん、どうし」

「アハッ!ロト」

それがロトが聞いた最後の言葉だった。

第十七話

バアン！バアン！バンバンバン！！

「…つち！逃げられたか、すばしっこい奴め！」

「ネプギアそっち行つた！お願い！」

「やったよお姉ちゃん！ヘッドショットが決まったー！」

三人でガンシューティングゲームをしているうずめたち。

そしてロトは。

「いたた、思いつきやりやがってうずめの奴」

「ハハハ、今度はロトが悪いよ」

「解せん、別に俺の好みが誰だろうと良いだろうに。

訳がわからん」

「それが乙女心つてもものさ」

「俺にはわからん」

「君も女神化できるんだし理解できるんじゃないかい」

「言つてくれる」

うずめたちと少し離れたところで海男と話していた。

すると、ネプギアがゲーム機から離れこちらに来る。

「…うずめさん、凄く楽しそうですね」

「まあ、この次元にいた人間はあいつと俺だけだったからな。それに、

俺はあまりあんな風に遊んだりしないからな」

「それに、デカブツのこともあったからね。オレも、あんなにはしゃぐ

うずめは久しぶりだ。…やはり、うずめはあの顔の方が似合う」

「…どうした、脈アリか？」

「…いや、どちらかというと娘って感じだな」

「なるほど」

(なんか、この二人って似てる?)

ネプギアが、ロトと海男の会話を聞いて考えていると。

「ねえ、ネプギア。上手くあてるコツとかあるの？」

「えつとね」

「おい、ねぷつちだけずるいぞー！」

「いいですよ。じゃあ、うずめさんもお姉ちゃんと一緒にこっちに…」
ネプギアが二人にゲームのコツを教えようとした瞬間。

「…あ」

ネプギアは何かに気づいたかのように声を漏らす。

そして。

「そうだ、そうだったんだ。そんな簡単なことだったんだよ！」

(こんな簡単なこと、どうしてもっと早く気づかなかっただろう)

「ん？どうやら、悩みは消えたようだね」

「・・・」

「…どうしたんだい、ロト？」

「…いや」

(やはり、ネプギアもまだ子供か)

内心、ため息を吐くロト。

「いやあ、遊んだ遊んだ」

「また、一緒に行きましょう」

ドガーン！

「な、なんだ!?!」

うずめたちが楽しげに会話をしていると、突然崩壊音がした。

「うずめ、あそこだ！向こうになにかいるぞ」

海男の指す方向には。

「ウイー…ン」

機械タイプのモンスターがいた。

「へえ、こんな奴が隠れてたのか」

「あれはおそろく「ハイハイ、省略、省略」ちよ!?!」

「訳のわからん専門用語を言われても時間の無駄だ。

そんなことしてる暇があるならサツサと構えろ」

「は、はい」シヨボーン

「こらー！ネプギアをいじめんなー!」

「阿呆は黙ってる」

「ひ、酷い！」

「…と、とにかく行くぞ！」

その後メチャクチャ、ボコボコにした。

「ふう。見掛け倒しだったな」

「ねえ、お姉ちゃん。このロボット「なんか、コアっぽいのがあったぞえー!？」

ネプギアの言葉を遮り、本来ネプギアが見つけるはずだったコアパーツの代用品を見つけたロト。

「ひ、酷いですよー! 何で私の時だけ邪魔するのですか!」

「お前の話長いから、描写するのが面倒なんだ」

「メタい!？」

「それなら、残った部分は分解すればいいさ」

「…邪魔しません？」

「ああ」

「なら、お言葉に甘えてー」

「まあ、全カットだがな」

「うえーん!?! 酷いよー!?!」

ゲームセンターにネプギアの泣き声が響き渡った。

第十八話

「修理、できました」ズーン

ネプギアはゲームセンターで起きた事を未だに気にしていた。

「お、おう、よかったな。これでやっと元の世界に帰れるぞ」

「けど、こっちの世界に来ている間に仕事がたまってると思うと、素直に喜べないんだよねえ…」

元の世界に帰った後の事を考えたため息を吐き愚痴をこぼすネプテューヌ。

そして、それを聞いていたイストワール。

それを聞き、今度はイストワールが愚痴をこぼす。

それを都合の良い返しをするネプテューヌ。

「…コントか」

「ハハハ」

俺の言葉に苦笑いするネプギア。

「さて、次はエネルギーだね」

海男の言葉に一齐に俺を見るうずめたち。

(^ω^#)「おまえら」

「頼む、ロトー！」

おまえにしか頼めないんだ!!」

「…はあ、わかった」

「本当か!? やったな、ねぶつちーぎあつちー！」

「デイン」

内心かなり頭にきているロトは、右手に雷が迸る。

おお!! と声上がるなか、ロトは雷が迸る右手で転送装置に触れる。

すると、転送装置が動きだす。

「それじゃあ、お別れだね。…わたし、うずめたちの事はぜーったい忘れないからね」

「ああ、俺もだ。ねぶつちたちの事は絶対忘れない」

『ではネプギアさん、わたしの指定する座標をNギアに入力して下さい』

い』

「…あの、いーすんさん。帰るの、もうちよつとだけ待ってもらえませんか?」

(いや、割ときついんだけどコレ)

今、ロトは雷魔法の『デイン』で転送装置に電力を補給しているが、これがまた難しい。

少しでも弱いと機能せず。逆に、少しでも強いとショートしてしまうため、その中間の電力を適確に送っているのだ。

『突然、何を言い出すんですか。ネプギアさん。』

まさか、ネプテューヌさんの怠け癖がネプギアさんにまで伝染ってしまったただなんて…。真面目なネプギアさんだけが救いだっなのに、ネプギアさんがネプテューヌさん化してしまつては、歴代の女神様たちに会わせる顔がありません』

「あれ、もしかしてわたしデイスられてる?」

「いや、そんな事はいいから早くしろ」と思うロト。

「いえ、私はただうずめさんやロトさんのお手伝いを、最後までしてから、帰りたいんです。

うずめさん、私。

あなたたちを最後までお手伝いします」

「…ツー」

「いやらん!早く帰りやがれ!!?」

喉まで出かかった言葉を必死に飲み込むロト。

今、喋れば集中が切れてしまうためである。

「だから、マジエコンヌを倒して全部解決したら、一緒に私たちの世界に来ませんか?そののなら、お姉ちゃんもいるし、美味しい食べ物だつて、ゲームだつてあります。だから、一緒に行きませんか?」

「頭、痛くなつてきた。あれ、鼻血?」

限界が近いロト。

「……………。…ああ、なんだ。そういうことか。ねぶつちといい、ぎあつちといい。ほんとの姉妹は優しいんだな。こんな俺のために、そこまで悩んでくれてさ。ありがとよ、ぎあつち」

「じゃあー！」

「お前の気持ちは嬉しい。…けど、ごめん。一緒には行けねえ」

☒:…ん、おかしい。目が霞んできた”

長い集中状態と魔力の消費で意識が朦朧としてきたロト。

「ねえ、ロト。大丈夫、これ、やばいじゃない？」

鼻血を流しながら目を擦るロトに、気づいたネプテューヌは心配する。

「ど、どうしてですか？こんな誰もいない世界に二人だけだなんて寂しすぎます」

「こんな世界だからだ。それに、今、転送装置を動かしているのはロトなんだぜ？そのロトがどうやってそっちの世界にいくんだ。なあ、ロト……ト……ト……」

「…っ？どうしまし…た…:…:か」

ロトの方を向き、固まったうずめを不思議に思い、ロトを見ると。

「ねえ、ロト!!ロトってば!!!」

「」

鼻血を流しながら右手だけは転送装置に触れて電力を供給している状態だ倒れているロトと、そのロトを揺らして呼びかけるネプテューヌがいた。

「ロ、ロト……!!?!?! / ロトさん……!!?!?!」

ガタン!?

すると、突然施設が大きく揺れ、ロトの手が装置から離れる。ロトの手は装置から離れると少しの間だけピクピク動いた後に動かなくなつた。

『ロ、ロト……!!?!?!
!!!』

第十九話

「ロト、ロト!…クソ!誰がこんなことを!」

ロトが起きていたのなら、「おまえだ」と言っていたらろうセリフを言ううずめ。

「きつとあの地震で」(※違います)

「許さねえ!ぜってえーぶっ飛ばしてやる!!?」

「まってよ!うずめ!!」

「ま、待ってくださいーい!!」

外へ行こうとするうずめに慌てて後をつけるネプテューヌとネプギア。

「…はあ」

その場に残ったのは、気絶したロトとそんな彼を見る海男だけだった。

「ハーツハツハツハツハツ!モンスター共よ、こんな建物壊してしまえ!わたしの計画を邪魔した者たちを逃してたまるものか!」

「ツ!テメエがロトを!」(※あなたの所為です)

「もう!なんでこんな時に来るのさ!今、ロトが大変なんだよ!」

「なに?それはいいことを聞いた」

「なあ!テメエツ!これ以上ロトになにをする気だ!」

(※まだ何もしてません)

(これ以上?)

「…まあいい。何、あの小僧にも我が計画を邪魔されたからな。地獄を味わわせてから、ゆつくりと殺してやる」

「なんだとテメエ!」

ニヤニヤと笑いながら話すマジエコンヌと怒るうずめ。

「テメエだけは許さねえ!ぜってえー、ぶっ倒す!!」

「フーハハハハ!ゆけ、モンスターたちよ!」

らわせた者。

それは、本来建物の中で休んでいるはずの

「ロ、ロトー！」

ロトだった。

「うずめー！」

「海男!!」

後から現れた海男。

「うずめ、敵が多すぎる。ここはロトが時間を稼ぐからいったん建物の中に逃げるんだ」

「なに言ってるんだ！ロト一人残して逃げられるか!!」

「うずめ、落ち着くんだ、あいつの目的は転送装置を破壊してねぷっちたちをこの世界からださないこと。だから正直に戦わなくても、ねぷっちたちさえ逃がせば、オレたちの勝利だ」

「なるほど」

うずめは海男の話に納得し引き下がる。

「ねぷっち、ぎあつち。撤収だ、早く転送施設に入れ」

「ねぷっ!」

「え、けどまだモンスターが…」

うずめの言葉に驚愕する二人。

「作戦変更だ！モンスターなら、ロトが相手をしてくれる。だから早く中に入るんだ！」

うずめに急かされ、施設に入る三人。

施設の中には、すでに転送装置を起動している海男がいた。

「ねぷっち、ぎあつち、さあ、早く転送装置に」

「イヤイヤイヤ、あんなに大群がいるのにうずめたちを残していけないよー！」

「大丈夫だ。」

デカブツに比べれば数が多いだけの雑魚なんざ俺とロトがいりや大したことないさ」

「で、でもエネルギーは」

「それなら問題ない。」

エネルギーはロトが持っていたシエアクリスタルを使わせても
らった」

「ダガン!?」

『!?』

「…どうやら、扉が破られたようだね。」

時間がない、二人共、転送装置に、そして、ぎあつちはイストワールに転送の合図を」

『それなら、準備は整っています。』

みなさんの状況はこちらでもNギア経由で把握しています』

「よし、二人共入ったな。」

まさか、こんなに慌ただしいお別れになるとは思ってもいなかった
が…向こうの世界に戻っても元気だな」

「うずめこそ、無理しちゃダメだよ?」

「ああ、お前らが入ったら、適当に逃げるさ」

「……………」

うずめたちの行動に未だ納得仕切れていないネプギア。

ドオン!!

「チィー!」

『!?』

すると、通路から、爆発に押し出されたロトが現れる。

「見つけたぞ、小娘共!」

「くっ!もう来やがったか」

そして、後からやってくるマジエコンヌとモンスターたち。

「ツ!なにしてやがる!!早く行け!!!」

「させるものか!ゆけ、モンスター共!」

マジエコンヌの指示により、二体のモンスターが襲いかかる。

「…ちっ、ハアア!」

斬っ!

『ウガアア!』『ギギユアア!!』

ロトは向かってくる二体のモンスターを剣を振るい叩き斬る……
が、モンスターの影に隠れていたマジエコンヌがモンスターが斬られ

た瞬間飛びだした。

「なっ!? クツソツ!!」

突然、飛びだしたマジエコンヌを急いで追うロト。

『それでは、転送、始めます!』

「ちっ! 今からでは止められんか! ならば、貴様だけでも死ねー!」

今からでは、ネプテューヌたちを止めることはできないと理解したマジエコンヌは、標的を転送装置からうずめに切り替えた。

「っ!? ハアアアアア!!!」

うずめを助けるためスピードを上げるロト。

だが、うずめを助けようとしたのはロトだけではなかった。

「うずめさん、危ない!」

「ちよ、ネプギア! ネプギアーーーーー!」

キュイン

転送装置内にいたネプギアが突如、うずめを助ける為、飛びだした。

ネプテューヌは突然、飛びだしたネプギアに反応できず、そのまま転送された。

第二十話

「そ、そんな。転送装置が…」

「うずめさん、大丈夫ですか」

「馬鹿野郎!!お前、自分が何をしたのかわかってんのか!!」

「だって、あのままじゃうずめさんが!」

「はああああ、ゼアツ!……喧嘩なら後にしろ!今は逃げるぞ!!」

ロトはモンスター斬り伏せ道を作りうずめとネプギアと海男を呼ぶ。

「くくく!!話は後だぎあっち!!」

「は、はい!」

うずめと海男を抱いた海男はロトが作ってくれた道を通り脱出した。

ロトも、飛び出してくるモンスターを倒してうずめ達を追う。

ロトやうずめ達は廃街から遠く離れた森の中に逃げ込んだ。

「はあ…はあ…」

「なんとか、逃げ切れたみたいだな。おい、ぎあっち。何であんなことをした!」

「だってうずめさんが危なかったから、気付いたら、体が勝手に動いていたんです」

「俺の事なんかどうでもいいんだよ!折角帰れるチャンスだったんだぞ!それを、俺なんかの為に無駄にしてどうすんだよ!!」

「……うずめ」

「あ、何だよロト「それはネプギアへの侮辱だ」はあっ!?!」

訳がわからないって顔をするうずめ。

「ネプギアはお前の為を思って行動したんだ。元の次元に帰るよりもお前の事を優先したんだ。なのにそのお前が『俺なんか』なんて言うのはネプギアへの侮辱以外のなんでもない、謝れ」

「な!?!だ、だってよ」

「お前だって折角助けた相手に『自分なんかほつとけ』なんて言われたくないだろう」

「うぐつ、……だからってこれじゃ申し訳なさすぎるだろうが」

「……うずめ。」

お前の言いたい事はわかる。だが自分の事を蔑ろにするな。お前は必要な『人』^神なんだ。

「うずめ。もうこれは過ぎた事だ。今は次に何をするかを考えるんだ」

「そんなの、今すぐ戻って一匹残らずぶつ飛ばすに決まってんだろ！」
「落ち着け、たった今逃げてきた俺達に何が一体出来る」

「それに仮に戻れても、あそこはまだ壊れたんじゃ転送装置も使えないと思うよ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ!!このままオメオメ逃げろって言うのか「落ち着け」と言っているだろ!!」——ツ!?!」

認める事が出来ないうずめにロトが喝を入れる。

「うずめ、奴らはデカブツと違って明確に意思を持って襲ってくる以上はここを離れることを提案しよう」

ロトの喝によって静かになった場に海男が言いたす

「……アイツから逃げろっていうのか?」

「冷静に考えろ、体制を立て直す。次に俺達が打って出る為の作戦も必要だ」

「そして、ぎあっちを元の世界に戻す方法もね」

「……わかった」

「ネプギアもそれでいいな」

「は、はい」

ロトの問いにネプギアも答える。

答えは当然YES。

「では、本拠点に戻ろう。あそこなら仲間はたくさんいるし、なにか方法が見つかるかもしれない」

「あ、あの」

「ネプギア。聞きたい事もあるだろうが時間が惜しい。歩きながら話

そう」

「わ、わかりました」

うずめ達の本拠点に向かって進んでいると洞窟が見えた。

「この洞窟が本拠点なんですか？それにしても、中からはモンスターらしき鳴き声が聞こえてくるんですが」

「ああ、奴らは晩飯兼トラップだ」

「ええええ!?!」

「ロト、ぎあつちに嘘を教えなくてくれ」

「イツツジヨーク」

平然と無表情で言うロトの戯言に本当だと信じてしまったネプギア。
ア。

「シリアス続きは原作ネプテューヌこれに合わないからな」

「メタいですよ」

「ははは、ここはこの間見つけた近道さ。目立つ地上を歩くよりこっちの方が見つかるリスクが少ないからね」

「もし奴がこの洞窟に入ってきたらほぼ一本道だから見つかり袋のネズミになりやすいがな」

「……………。(。D。111)」

「ロト、頼むから不吉なフラグを立てないでくれ。うずめときあつちからの視線が痛いんだ」

「ほお…」

後々ロトのセリフ通りになるのは言うまでもない。

「なあ、ぎあつち。今更だけど、Nギアは忘れずに持ってきてるよな？」

時より襲ってくるモンスターを迎撃しながら歩いていると当然う

「まあいいや、要はここでアイツをぶっ倒せばいいだけの話だ」

「その通りです！マジエコンヌ、あなたをここで倒させてもらいます
!!」

「な、なに!? 貴様、今なんと言った!!」

「…へ? 『マジエコンヌ!』ここで、あなたを倒させて「ここでいっぺん
区切ります (b) ヲロト)」

「ええええええ／＼なにいいいい!!?」

第二十一話 VS. マジエコング

「はあああ!!」

甲高い金属音。槍と剣がぶつかり合い火花を散らす。

マジエコンヌとロト、一度二度三度と交差する二影。

「死ねえい!!」

「断る」

ガキイン、ガン、ギャリリ。

マジエコンヌの槍を突き出し、ロトはそれを斬り上げで弾く。

「ぬうおおお!!」

「ハーアアア!!」

繰り放たれる剣と戟、重なる刃の音は百に至る。押し勝ったのはロトだ。槍を弾き、此処だ!と剣を薙ぐ。

咄嗟に後退するマジエコンヌだが、切っ先が僅かに掠り胸に浅い傷ができる。

「おのれえ……ッ」

「俺だけ見てもいいのか?」

「なに?——ッ!」

「当たって、ください!!」

銃剣『M P B L』から熱線を射つネプギア。

一直線に伸びる奇彩な光線、ロトは既に射線上から逃れておりマジエコンヌにのみ向かう。

「ぐううう……!!!」

槍を盾にしてビームを凌ぐ。幾つにも分散、枝分かれしたビームが彼方此方の地面や岩場を焼く。

「るうおおお!!」

一際大きく槍を振るいビームを打ち払う。肩で息をするマジエコンヌ。

ふと、自身と周りが暗くなったのに気付いた。影だ、上を見上げると。

そこには大きな岩石が。

「くらえー!!」

「うわあああ?」

巨大岩の上にはうずめがおり、岩をマジエコンヌに向けて押し落とした。

「ぶつつぶれるー!うりいいいい!」

マジエコンヌを巨大岩の下敷きにし、更にそこに拳の連打を打ち込むうずめ。最後に強力な一撃を叩き込み、『最高にハイ』とでも言うように両腕を広げ（可愛らしい）奇声をあげる。

うずめの足元からぴきり、と罫が入る音がした。

「なああめえるなあああ!!!」

「うわー!」

岩が粉々に砕け散り、その衝撃でうずめが吹っ飛ばされるも難無く着地———した後に『おとつと』とバランスを崩しコケそうになる。

うずめの元にロトとネプギアが近寄る。マジエコンヌの戦闘の開幕で女神化したうずめとネプギア、オレンジハートとパープルシスターが顕現していた。

「今のでわかっただろう。諦めろ」

「ほぎけ!私は犯罪神、ゲームギョウ界に終焉をもたらす者だ!!〔破滅の導き〕!!」

マジエコンヌがこちらに手を向ける。マジエコンヌの手先で黒い魔力が爆ぜる。

すると、ロト達の元に赤黒い魔力の芳流。竜巻であり爆発でもあるその魔法はまるで何もかも呑み込むブラックホールのように。

「きやあー!」

「ぴやあー!」

「チイツ」

マジエコンヌの魔法にうずめ、オレンジハートネプギア、パープルシスターロトの三人がダメージを負う。

「いったあーい!!」

「やってくれたなー!」

うずめとロトが飛び出しお返しにと技を繰り出す。

鮮やかなオレンジ色の魔力をドリルのように腕に纏わせるうずめ、両手で握った剣の刀身に白の魔力に黒の稲妻を帯びさせる。

「必殺パンチ！【夢幻粉碎拳】！」

「覚悟しておけ、【聖魔斬】！」

二人の攻撃をガードしようするも叶わずマトモにくらう。

「ぐわああああ?!」

「撃ちます、ファイア!!」

「あああああー!!」

ロトとうずめの二人の攻撃を怯んでいるマジエコンヌをネプギアが銃剣から魔弾を数発射ちマジエコンヌを撃つ。

「凍てつけ、『ヒヤダルコ』！」

地面に手を添え氷の魔法を唱える。

地面をつたい一直線に氷の道路が伸びマジエコンヌに届くと足先から膝元までを鉄のように硬い氷が凍結、固定する。

「そおれ、うにゃあああー！」

スピーカーで増大化した爆音ボイスが衝撃波となりマジエコンヌに浴びせる。

二年以上共に暮らし戦ってきた二人。コンビーネーションは見事なものである。一人少し離れた場所にて銃剣射撃しているネプギアも舌を巻く。

傷やダメージの比率にどんどん差ができ、広がる。マジエコンヌは追いやられる一方だ。

「勝敗は決しました！降参してください」

「ほ、ほぎげ。オマエらなんぞにこの私が負けるわけが——」

「戯け、これほど差をつけられてまだ力の差がわからない程お前も馬鹿じゃあるまい！」

「ぐ、ぐうう……。ならば！」

後方に跳んでロト達から距離を取るマジエコンヌ。

突然の行動、逃げる様子ではないマジエコンヌの行動に困惑しながら警戒を解かず武器を構える三人。

「見せてやろう！我が真の力を——!!」

ブワツと黒い炎のようなモノがマジエコンヌの胸前に現れる。マジエコンヌはその黒い炎を槍を持たない方の手で握り、潰した。

マジエコンヌの握り拳の隙間から漏れて黒の粉塵が一瞬でその質量を増大させマジエコンヌの体を覆い包む。そして粉塵が霧散すると、

『ヌアワーハツハツハツハ！』

恐らくマジエコンヌが変身したであろうウサギ様な魔女の腰から下が怪物と繋がった姿で現れた。

四本の腕、ギョロリと蠢く単眼の巨大な胴体、背中に羽の様なモノがあり、下半身は首が無い四足歩行の亀に左右に大きく割れた口に見るからに怪物ですといわんようなギザギザの牙。その下半身の先に兔化したマジエコンヌが生えていた。

変身したマジエコンヌの姿に驚愕するネプギア。どうやらネプギアの居た次元^{せかい}で戦った敵に姿形が似ているようだ。

『ヌーフハハハハ！絶望しろ！恐怖しろー!!』

変身マジエコンヌの単眼が妖しく光る、魔力熱が集結している。そしてカツと見開くと閃光が閃いた。

「離れるー！」

いち早く察知したロトが声を上げる。ロトの声に従い三人が別々の方向へ飛んだ。ロトは左へ、うずめは右斜めへ、ネプギアは上へ。

その直後変身マジエコンヌの単眼から光線が放たれ三人の居た場所へ照射。爆発を起こす、煙が晴れると地面が赤熱し溶解しているのが見て取れる。

「なにアレ!? あんなの当たったらうずめ達溶けちゃうよ!？」

『ヌアツハツハツハ！ならこんなプレゼンならどうだあ?』

変身マジエコンヌの四本ある腕、その腕それぞれに魔力の砲弾を灯し投げつけてくる。

「あわわわー！」

「危ない!!」

うずめに殺到する魔力の砲弾。ネプギアがうずめを押し倒したことで直撃は免れた——が、第二波はそうもない。

『今度はその体勢で避けられるかな!!』

「ツツ!——くっ」

マジエコンヌの四本の腕、それぞれから魔力を送りとびきり大きな魔力弾を作る。高笑いをあげながらその大魔力弾を放つ。

二人は今倒れた姿勢。今すぐ起き上がったとしても回避には間に合わずネプギアの下にいるうずめはどうしようもない。ネプギアはうずめを庇うように覆い被さり目を瞑る。

二人を襲い迫る大魔力弾、それに突如剣閃が刻まれる。

左上から右下へ袈裟斬りに、続けて左下から右上へ逆袈裟斬り。

——【必殺Vカッター】

ロトの奥義が一つ【必殺Vカッター】に大魔力弾は切り裂かれる消失する。

「俺を忘れるなよ」

ロトの剣を手に握りロトが駆けだす。

変身マジエコンヌが魔力弾を投げつけてくるが隙間を潜り抜けて接近、ジャンプして変身マジエコンヌへ斬りつける。

変身マジエコンヌもロトのジャンプ斬りに眼光線で迎え撃つ。

振り下ろした剣は変身マジエコンヌの眼光線とぶつかり、眼光線を打ち消されロトは吹っ飛ばされる。

両足で地面を削りながら後退、うずめやネプギアの元まで飛ばされる。ちらり視線を二人に配り、そして変身マジエコンヌを見据えて剣を構える。

「……『バイシオン』、『ピオリム』、『スクルト』、『ベホマラー』」

「え?これ、は?」

「ロトの魔法だよ」

「ロト、さんの?」

ロトが唱えた三つの魔法。『バイシオン』『ピオリム』『スクルト』。筋力上昇、俊敏上昇、耐久上昇の補助系全体魔法。これらの魔法により三人の身体能力が向上。

そして『ベホマラー』。自分を含めた味方全員の傷を癒し体力を回復させる治癒魔法。これにより三人の傷がほぼ完治。

